



—誰でも読めるシリーズ—



『痴愚神礼讃』



エラスムス

大庭好喜

まえがき

現在、あふれかえるほどの本が出版されています。ドキュメンタリー・小説・随筆・伝記などジャンルはさまざまです。また、日本人が出版したもの、外国人がその母国語で出版したもの、また、つい最近刊行されたもの、書かれて1千年以上が経過するものなどいろいろです。

ところで、芥川賞・直木賞などを受賞した作品には、何百万部も売れ、ベストセラーにもなるものもあります。現代の日本のこれらの作品を読み感動することはすばらしいことだと思います。一方、長い時代をとおして人々に読まれ続けてきた「世界の名著」と呼ばれるものを手に取り読むこともまた大事なことだと思います。「世界の名著」といえば、学生時代に世界史や倫理の授業で著者と作品名を覚えたことを思い出す人もいらっしゃるでしょう。例えば、ダンテの『神曲』、ボッカチオの『デカメロン』やギリシャ思想のところでは、プラトンの『ソクラテスの弁明』や『饗宴』などがそうです。しかし、これらの本を実際に読んだことのある人はどれぐらいいらっしゃるでしょうか。今でも著者とタイトルは覚えているが、その内容は全然分からないという人がほとんどではないでしょうか。無理もないことだと思います。仮に書店の訳本コーナーでそれを見つけて、ページをめくってみても、その内容が分かりにくく面白く読み進んでいけないからです。翻訳者が原文に忠実に翻訳しようとして、訳本の内容をかえって複雑にしまったり、専門的訳語を使うことにこだわったりするために、一般の読者が読むにはあまりにも難解な訳本に仕上がってしまっているからです。語学に習熟して原文を直接読める人は、原文では理解できるのに訳本となるとかえって分かりづらくなるという話を聞いたことがあります。

そこで私は、著者の本の内容をできる限り変えずかつ大胆に、われわれが通常耳にする日本語を使い、簡単に読める内容に改めました。完訳本を読んだと同じぐらいの理解と満足感を短時間で得られるように努めました。通勤・通学の電車の中でも気楽に読め、頭に入るものをめざして書きあげました。まずは、読むことによって、過去の偉大な思想家の著書に直接ふれてそのすばらしさを味わっていただきたいと思います。―誰でも読めるシリーズとして順次刊行していきますので、どうぞ手に取ってお楽しみいただければ幸いです。

1 トマス＝モアにささげる

この前、イタリア旅行を終え、イギリスに戻る馬車の中で時間がたっぷりありましたので、親愛なるあなた（トマス＝モア）のことを思い浮かべながら、あなたと私の共通の関心事についてあれこれ考えてみました。場所が場所だけに、あまりまじめなことではないほうがいいと思い、痴愚女神を礼讃してみようと思いつきました。当然あなたは、痴愚女神などとは縁がないし、むしろ敵でもあろうことは十分承知のうえでのことです。

ただ、あなたは人並みはずれた洞察力はお持ちでありながら、一方で笑顔を絶やさないきさくな性格の持ち主ですので、このようなちょっと機知（きち）のきいた冗談はたぶんお好きで、楽しんでくださることだろうと思い、書にすることにしました。こういうしだいですから、この書はあなたのために書き、あなたに差し上げるものです。どうぞ手元において大事に保管していただきたいと思います。

たしかに、このような書は軽薄（けいはく）すぎて神学を研究する者にはふさわしくないとか、キリスト教徒としては辛辣（しんらつ）すぎて慎（つつし）みに欠けるとの理由で非難する人間は多いことだと思えます。また、話題の軽薄さや冗談（じょうだん）めいた調子に気を悪くされる方もいらっしゃるかも知れません。しかし、この程度のことは過去多くの人々が言説（げんせつ）として残し、書として著されてきたことです。非難するくらいなら、ある一人の人間が遊びで書いたものだと思って読み流していただきたいと思えます。

どんな職業の人にも彼らなりの気晴らしがあります。まじめな学者にも気晴らしがあってもよいのではないのでしょうか。冗談をまじえて表現したほうが、ただまじめなことを書いただけのものよりは役立つ場合だってあるのではないですか。また、つまらぬことをつまらない事でないように書くことは、ひじょうに愉快（ゆかい）なことです。その意味で、痴愚女神を礼讃したこの本は、つまらないことを題材としてはいますが、ひじょうに面白いものになったのではないかと思います。

他人にかみつき茶化（ちゃか）すことは良くないといわれるかもしれませんが、文筆家には、一般の人間を書物においてからかう程度のことは許されてきたはずです。今の教会の偉い方々が自分をほめてくれることにしか耳をかさないことにはほとんどあきれています。また彼らは、キリストを冒瀆（ぼうとく）するようなことに対しては平気なのに、教皇や王侯に対するきわめて軽い冗談でさえ、その人々にご厄介（やっかい）になって生活しているからでしょうか、決して受け付けようとはされません。いったいどういう考えをお持ちなのでしょう。

私は、特定の人を名指しして非難したりするようなことはありません。人間にとって良くないことを批判し、忠告しているだけなのです。その中には当然自分自身に対する自己批判もあります。特定の人ではなく、あらゆる悪徳をとりあげているのです。もし誰かが自分を非難したと訴えられるなら、その人こそ良くないことをしているということを自ら認めていることになりませんか。この世には、具体的に名ざしで非難したのも目にしますが、この書は具体的に人の名をあげたりはしていません。人を傷つけるために書いたものではないからです。人々に楽しんで

らうために書いたものなのです。

私は恥ずべきことよりも、笑うべきことを取り上げたのです。それでも心穏（こころおだ）やかでない方がおられたら痴愚女神の話題となることは、名誉なことだと考えてください。弁論の士であるあなた（トマス＝モア）にこのような言い訳は必要ないでしょうが、どうぞあなたもこの痴愚女神を弁護してやって下さい。

2 痴愚女神の礼讃

この世の人々が私（痴愚女神）の悪口を言っていることはよく知っています。しかし、私だけがみなさんをウキウキした気分させることができるのですよ。その証拠に私がここに姿を現したとたんみなさんの表情が陽気になったではありませんか。先ほどまではあれほど心配そうな顔をしていたのに、お酒でも入ったかのように急に楽しそうな顔になっているではないですか。

たとえば、太陽が昇り、あるいは厳しい冬が終わり新緑の春がやってきた時、自然の姿ががらりと一新します。まるでその時と同じでもあるかのように、私の姿を見るやいなやあなた方の表情はがらりと明るくなりました。有名な弁舌家が準備に準備を重ねて作りあげた原稿をもとに皆さんの前で演説をして、やっとどうにかみなさんから憂（うれ）いを取り除けるかどうかなのに、私はみなさんの前に姿を現すだけでそれをやってのけることができるではありませんか。

なぜ私が今日、こないでたちでみなさんの前に現れたのかを今からお話しいたしますので、どうぞ気楽な気持ちで聞いてください。ただ、今回は、詭弁（きべん）学者をきどって話をしてみようと思います。とはいえ、私は若者にばかげたことを注ぎ込んだり、単に口げんかのやり方を教え込むようなことをしようとするわけではありません。古代の詭弁家たちがさかんに神々や英雄を礼讃したことになって、私もあるものを礼讃しようというのです。ただ、その対象とは私自身すなわち痴愚女神なのです。

世間では自画自賛（じがじさん）するような奴は阿呆（あほう）者・馬鹿者だとさげすまれますが、私はいっこうにかまいません。いやそれこそが私に最も似つかわしい呼び名だと思えます。なぜなら、自分というものは誰よりも自分自身が一番よく知っているので、自分が自分を語るこそ最も適したことだと思うからです。

まあ、私が自分のことをほめたとしても、どこかの偉い方々と比べればいたって謙虚（けんきょ）だと思えますよ。なぜなら、それらの偉い方々は、作家や詩人にお金を渡してまでわざわざ自分をほめたたえる大嘘（おおうそ）を言わせたり、書かせたりするぐらいですからね。またこういうお偉方が人々の前で、まるで孔雀（くじゃく）のように羽を広げ、とさかを立てようものなら、恥知らずのおべっか使いどもがおおげさにほめたたえるものです。彼らのお世辞（せじ）は黒を白にし、蠅（はえ）を象（ぞう）にまでしてしまうものです。私のようにほめてくれる人が誰もいない場合は、自分で自分をほめるしかないではありませんか。

ところで、私は人間たちの恩知らず、無頓着（むとんちゃく）にはほとほとあきれます。私にはるか昔からみなさんに多くの情（なさ）けを注いできましたのに、みなさんの中にこの痴愚女神に感謝の意を表される方々は、一人もいらっしゃいません。自分に災厄（さいやく）が降りかからないように必死で神には祈られるのに、いろいろな情けを受けているはずの痴愚女神である私に対しては恩を示し、礼讃してくださる人など一人もおられないのです。なさけないことです。

これから私がお話することは、練（ね）りに練ったものではなく、即興（そっきょう）に思いついたものです。ただ、嘘、偽りでないことだけは保証（ほしょう）します。それだからといって、よくいる演説家と一緒にしないでください。彼らは、何十年もかけて仕上げた演説を、さも2～3日で遊び半分につくりあげたものでもあるかのように装（よそお）って声高に演説します。しかし、

私は決してそのようなことしません。頭に浮かんだことをすべて口に出すだけです。

ひょっとしたら、みなさんは私が学者のように、痴愚女神とはどの位置にある神か、どのような役割を果たす神か、などの定義から述べると思っておられるかも知れませんが、そのようなことを言うつもりはありません。神の力をやれどれぐらいたかいうことは適当なことではないと考えるからです。第一、現に私はみなさんの前にこうやって姿を現し、みなさんもそれを実際に目で見ているのですからその必要などないでしょう。私こそが、あなたがたに「真に幸福を分かち与える」ことのできる女神そのものなのです。

私のこの姿を見れば、私が美や知恵の女神ではないことなどは、すぐ分かるはずだと思います。私は化粧をしませんし、心に感じているそのままだが表情に表れます。「獅子(しし)の皮を着たロバ」と呼ばれる人々のように賢人(けんじん)ぶったりすることはありません。人間の中には、私の仲間なのに私と関わり合いになることを恥じたり、中には人を罵倒(ばとう)する時、私の名前を用いる人もいます。しかし、そのような人こそが、賢い人だと人々に言われたいと思う、愚かな人間なのではないでしょうか。

ここまで、私もさも雄弁家のように話をしてしまいましたが、雄弁家と呼ばれるような連中は、話の何か所かに外国語を入れたり、あまり知られていない古い学術用語を入れたりします。そうすることで、たとえ間違っていることでもすばらしいものになるとでも思っているのです。聴衆者は聴衆者でその意味が分かる人は自慢げに反(そ)り返り、分からない人は分からないことで、ただただ感嘆するのです。また、みえを張りたい連中どもは、何も分からなくても分かったふりをして拍手喝采(はくしゅかっさい)をするのです。

さて、私のこの話り移りますが、私の父はあなたがたもご存じのプルтусという神です。この神は、その心しだいで神の世界も人間の世界もどうにでも自由に動かすことができる偉大な力を持っている神です。彼は、戦争も平和も政府も議会も結婚も同盟も遊学も勤労も人間のありとあらゆる公私のことがらをどうにでもすることができるとのことです。この神の力添(ちからぞ)えがなかったらどんな神もその力も発揮できないし、あなた方にしても、ろくな食事にもありつけないのです。この神を怒らせたものは救われようがありませんが、逆にこの神の庇護(ひご)を受ければ何をしても許されるのです。そのような父は、私は誇りです。

そしてその父が、女神の中で一番淡麗(たんれい)で陽気な青春の神と「愛の契(ちぎり)」を結び、その彼女が身ごもって産んだのが私なのです。私は、どこかの神のように母親の頭の中から生まれ出たりはしていません。私の誕生にいわく因縁(いんねん)などありません。ただ、通常の営みのなかで生まれたのです。しかしみなさん、今の老いぼれたプルтусを思い浮かべないでくださいよ。当時の彼は、若々しく青春まっただ中で燃えたぎっていた若者だったのですよ。

今日ではどこで生まれたかがその者の身分の高さを決めますので、あなたはどこで生まれたのかとよく尋ねられます。私は、名高く有名な地で生まれたのではなく、種まきなどの労働をしなくても作物を収穫できる福楽(ふくらく)の島で生まれたのです。この島には、いろいろなことに役立つまた人の心をなごませてくれる多くの植物が自生(じせい)しています。また、勤労の必要もありませんし、老衰(ろうすい)とか病気というものも存在しません。そこで生まれた私は、誕生するやいなや泣き叫ぶのではなく、すぐに母親に微笑(ほほえ)みかけたそうです。そしてそこで、2人の魅力ある「

陶醉（とうすい）」と「無知」と呼ばれる女神の乳を飲みながら育ったのです。その2人は今も私のお供として私と共に行動しています。さらにそのほかにも、私のお供には、「うぬぼれ」「追従（ついしょう）」「忘却」「怠惰（たいだ）」「逸楽（いつらく）」「軽率無思慮（けいそつむしりょ）」「放蕩（ほうとう）」の神々、そしてさらに「美食」「眠り」の神々がいます。これらの神々は、私の誕生以来ずっと今でも私に仕え、忠実に私を手助けしてくれているのです。

これで私の生い立ちは分かっていただけたことだと思います。次に、私が神々や人間にどのような、どれだけの貢献（こうけん）をしているのかについてお話しします。よく聞いてくださいよ。神々たるゆえんとは人間の苦悩を和らげたり、さまざまな利便（りべん）をあらゆる人々に惜しみなく与えるものだとしたら、それこそ私は神々の筆頭（ひつとう）に位置するものではないでしょうか。

例えば、人間にとってその命以上に大事なものがあるでしょうか。それなら、人間の生命は誰のおかげで始まると思いますか。実は、人間の命の誕生の源は私なのです。どんな偉大な神であろうと剣や槍（やり）や盾で子どもをつくることなどできないのです。子どもをつくろうとする時には、喜劇役者のようなお面をかぶった顔にならなければならないのです。やぎと同じようなあごひげをはやした厳格（げんかく）なストア学者であろうと、その時には学説も放り出し、愚にもつかぬことをしゃべり始めたり、さまざまな狂気沙汰（きょうきざた）までしでかすようになるのです。どのような人でも父親になるときは、私のお世話になるのです。私なくして子どもなどをつくることはできません。もっとストレートに言いましょか。神々や人間はどこから生まれるのですか。頭から胸からですか。いえ、笑わずには語れないような下品ないや神聖な場所からですよ。

また、結婚後の不便・不都合をあらかじめ計算できていたら、誰が結婚などするでしょう。また出産の危険・子育ての苦勞を考えたら、どのご婦人が殿方（とのがた）のもとへなど行くでしょうか。それというのもその気にさせる私の侍女（じじょ）の「軽率（けいそつ）」「無思慮」という者たちのおかげなのです。さらに「忘却（ぼうきゃく）」という私の侍女がいなかったら、一度つらい思いをした人間が何回もあのような苦勞をするでしょうか。つまるところ、このような戯（たわむ）れ事から、哲学者先生も修道士と呼ばれている人も司祭もこの世に生まれ出ることができたのです。これが事実なのです。

私のおかげなのは、この生命の誕生だけではありません。実は、人生のあらゆる良いことはすべて私のおかげなのです。事実、快樂というものがなかったら人生はいったいどうなるのでしょうか。人生と言う名に値するものとなるのでしょうか。みなさんも、快樂こそ必要なものだと思っているみたいですね。ストア学派であっても人生における快樂までは軽蔑（けいべつ）はしていません。いくら隠（かく）したって、また他人を快樂から遠ざけることはあっても、自分たちはしっかり快樂を味わおうという魂胆（こんたん）であることは見え見えです。この痴愚女神が味付けしなかったら、人生なども悲しく、味気なく、不愉快でつまらないものになるのではないですか。「賢くなければいけないほど人間は幸せになることができる」と言った偉人もいるくらいです。

人生の始めのころは、一番楽しく、喜ばしい時期ですね。幼児はなぜあんなにかわいいのでしょうか。それは幼児に痴愚女神の魅力が備わっているからです。だからこそ、幼児を育てる苦勞

を人々に対してその楽しさでつぐなってくれるのです。幼児はこのようにして、その最も弱い時期に、まんまと大人の保護を手に入れることができるのです。

これに続いて、青少年時代がやってきます。この時代は、誰からも迎え入れられ、祝（いわ）われ、励まされ、援助の手が差し伸べられる時期です。この青少年の魅力はいったいどこから出てくるとお思いですか。これも、やはり私がおもたしているのです。私は、彼らに生じてくる分別心（ぶんべつしん）をできる限り遠ざけ、彼らが煩（わずら）いというものを持たなくてもいいようにしてやっているのです。

しかしながら成長していくと、彼らは知恵や経験を身に付け、しだいにその愛嬌（あいきょう）は色あせ、澆刺（はつらつ）さは衰え、陽気さは冷え込み、その活気は減少していくのです。人間は、私から遠ざかれば遠ざかるほど、生き活きとしたところがなくなるのです。

そのあげくの果てにやってくる老年期は、自分自身の重荷にもなり、社会の重荷にもなる時期なのです。やりきれない時代がくるのです。そこでまたしても、私が現れるのです。私は死にかけた彼らを墓場の寸前から連れ戻し、あの最初のような幼年期に戻してやるのです。もしそれがなされなかったら、誰一人としてこの老年期を我慢（がまん）できる人間などいないのです。世間の人々が人は老人になると「子どもに戻った」ようだと言っているのは的（まと）を得ている指摘だと思えます。

それでは、私はどのようにして彼らを幼年期に戻すと思われませんか、隠す必要もないのでここで申し上げます。まず私は、彼らを小さな川に連れて行きます。そして、「永劫（えいごう）の忘却（ぼうきやく）」という水を彼らに飲ませるのです。すると彼らは今までの苦勞を洗い流して忘れ去り、若返ってしまうのです。すぐさま、彼らはめちゃくちゃなことを言いだしたり、幼子（おきなご）のような分けのわからないことを言い始めます。ですが、これこそが幼年期の特徴であり、魅力なのです。分けのわかった知恵を持った幼児などいやらしいお化けです。

完全な経験とすべてを見抜く判断力を持った老人など、だれが友人にするのでしょうか。老人とはわけの分からない、たわごとを言うようであれば付き合えないのです。そして、このたわごとこそが、賢人をさいなむ苦しみから老人を解放してくれるのです。それゆえ、そういう人こそ飲み友達として、適した者となれるのです。このような老人は人生への嫌悪（けんお）など感じないし、立派すぎる理性をもっているならとてももてないような自己愛を平気で持つことができるのです。私が彼らに恵みを与えているから当人たちも幸福ですし、友人やその他の人々にとっても楽しい存在となれるのです。賢人の口からは苦々（にがにが）しい言葉が発せられるのに、彼らは座って楽しくしゃべっていれば幸せなのです。その意味では、老人は会話をする楽しみをまだ知らない幼児の上をいく幸せを持っていると思えます。

子どもと老人は姿形が違うだけであとはよく似ていますから、「類は友を呼ぶ」で実に仲がいいのです。両者の違いは、しわの数と年の数だけです。それ以外の毛の薄い頭、歯のない口、乳が好きなこと、物覚えが悪い事、不注意な点など、ことごとくそっくりです。ですから、人間は年を取れば取るほど、どんどん童子（どうじ）に似てきて、ついには童子のように人生を惜（お）しむことなく、死を恐れることもなくこの世をおさらばすることができるのです。

他の神は、どんなことをあなたに与えてくれますか。あなたの姿を変えてくれますか。鳥やセ

そこで、人間の男にはこの程度の理知ではとても不足しているので、私は、彼らに配偶者（はいぐうしゃ）と言われるものを与えることにしました。女は阿呆ではありますが、気持ちのいい動物です。生真面目（きまじめ）さも持っていますので、いろいろと生活のうえで困ったことを和（やわ）らげてくれます。ただ、女性はどんなきれいな洋服を着ても痴愚は痴愚なのです。猿にどんなきれいな衣装を着せても猿であることと何ら変わらないのと同じことです。

ただ私が女性を阿呆だと言ったからといって、女性であるあなた方が、同性であるこの痴愚女神をさか恨（うら）みするようなことはありませんよね。女性とはこのように痴愚であるがゆえに、殿方より幸せなのです。まず女性は美しさをもっています。ゆえに暴君（ぼうくん）と言われる者でさえその美力により抑（おさ）え込むことができるのです。なぜ男性がいかつい顔をしてぼさぼさのひげでむさくるしい姿をしているかといえば、すべては賢さが犯したあやまちなのです。それに引き替え女性は柔らかい肌を持ち、その声は常に優しく、美しさを備えています。これは何のためか。そうです、男に気に入られるためですよ。それ以外に何の理由があるでしょう。そのために化粧をし、香油（こうゆ）をつけて自分を飾るのです。それゆえ、男は約束をかわしてまで、そこに快楽を求めるのです。だから男にとって女は痴愚にこしたことはないのです。この痴愚ゆえに男を喜ばせることができるのです。男がこの快楽のためにどんなバカなことでもするのを考えてみたら分かることでしょう。これで、人生最大の喜びがいかなるもので、どこから生ずるかがお分かりになったことだと思います。

しかし、特に男性の老人の場合ですが女性よりもお酒を愛する人がいますよね。酒があれば、女性を交（まじ）えなくても楽しく食事ができると言われるかたもいらっしゃるかも知れません。ただ、私は本当に楽しい食卓には痴愚が絶対に必要であると考えます。食事においては、座持（ざも）ち上手な滑稽（こっけい）で洒落（しゃれ）のある道化（どうけ）こそが沈黙（ちんもく）と退屈（たいくつ）を追い払ってくれるのです。目や耳や魂（たましい）すべてが楽しい話や冗談をたらふく頂戴（ちょうだい）してこそ、どんなものを口に入れてもおいしく食べることができるのです。実はこの食卓や宴会での余興（よきょう）を担当する神こそこの私なのです。たとえば、サイコロ投げ、乾杯（かんぱい）、舞踏（ぶとう）などすべて私が発案したものです。そんなものを賢人が作ってくれると思いますか。そしてこれらは、阿呆なものが含まれていればいるほど人生を楽しくさせてくれるものなのです。もし人生が始終（しじゅう）もの悲しくて、悲哀（ひあい）と憂鬱（ゆううつ）に包まれたものならこれほどつまらない一生などありませんよ。

一方ではこのような快楽をきらい、人生には友情ややさしさが必要だとおっしゃる方もいらっしゃることでしょう。彼らは、友情こそ空気や水や火に劣らず人間にとって必要なもので、これらのない人生とは人間界から太陽を奪い取るようなものだと言います。多くの哲学者も友情は人間にとって最大の宝であると言っています。しかし、実はこれにも私が関わっているのだと言うと驚かれることでしょうね。

しかし、よく考えてみてください。友人の欠点に目をつぶらせたり、思い違いをしたり、夢を見たり、さらには、その一番目につく欠点を美しいもの、長所として賞賛（しょうさん）することなどと見誤るのは、痴愚以外の何ものでもないではありませんか。ある者は、愛する人間ならそのいぼさえも美しいといい接吻（せつぶん）し、相手が発する異様な臭いさえうっとりしながらかい

でいます。また、ある父親はやぶにらみの息子を流し目をするなどと言います。これなど痴愚以外の何ものでもあります。このような痴愚こそ友情を保つ役割を果たすものなのです。

欠点を持たない人間などいません。すぐれた人間とは、せいぜい欠点が最も少ない人間と言えるのではないですか。だから完全を求めがちな、賢人と呼ばれる人の友情は憂鬱（ゆううつ）なものですし、友達といえるものはほとんどいません。いると言っても、ほんのわずかです。なにしろ、世の中の大部分の人というものは頭がどこかおかしく、奇妙（きみょう）な言葉を口走るものなのです。それなのに、賢人はそのような人を友人にしようとはしません。友情などは、似た者同士の間でしか生じませんからね。

たまたま、賢人同士が共鳴して集まっても気むずかしい連中ですので、その友情は不安定で長続きなどしません。彼らは鋭い目で友人となりそうな人間に対しても、その欠点を見つけてしまうからです。まあこのような人に限って、自分の欠点は背中（せなか）のあざのように見えないものですがね。誰にでも欠点はあるのですから、人の欠点を見えなくする痴愚があるからこそ友情が末永（すえなが）く保たれるのです。「美しくもないものを美しいと思う」からこそ、他人は笑うでしょうが、人生は愉快（ゆかい）となり、人は幸せになれるものなのです。

このことは、結婚についてはもっとよくあてはまります。もし、思い違いとか愛想（あいそう）だとか媚（こ）びへつらいとか冗談（じょうだん）とか虚偽（きょぎ）とかの神に働いてもらわなかったら、どれだけ多くの離婚やそれ以上の呪（のろ）わしい問題が起きてきたことでしょうか。もし夫がさも貞潔（ていけつ）そうにしている相手の結婚前の遊びほうけている状況をもっと調べていたら結婚などどんなに減ることでしょう。また、もし妻の品行（ひんこう）が、ばかで無頓着（むとんちゃく）な亭主の目をのがれおおせなかったら、どんな固い契（ちぎり）も結ばれたままというわけにはいかないことでしょう。これは、愚かな行為であるとは言えますが、しかしそのおかげで両者は気に入りに、結婚は続いていくのです。男はばかにされ、言いたい放題のことを言われますが、相手に接吻（せつぷん）しながらその不貞（ふてい）の涙をぬぐいとりながらも、一方で楽しい夢を見ているのです。しかし、このほうが、嫉妬（しと）にさいなまれ、なんでもかんでも悲劇にするよりはるかにましなことだと思いませんか。

要するに、私がいなければどんな集まりもなく、楽しく安定した結縁（けつえん）もありえません。お互いに幻（まぼろし）を作りあったり、互いにペテンが痴愚によりまるめ合うことがなかったら、下男と主人、生徒と先生、友人と友人、妻と夫のその他もろもろの関係が長い間続くはずはありません。みなさんは、こういうことをとんでもない話だと思われませんか。決してそうではありません。どうぞ次の話を聞いてください。

自分自身を憎んでいる人間が他人を愛せると思いませんか。自分自身といがみあっている人間が他人と折（お）り合えますか。自分だけで精一杯の人間が他人を喜ばせることができますか。この世からみなさんが私を追い払ったら、あなたがたは他人を我慢（がまん）するどころか自分自身を嫌い憎むことになってしまいますよ。女神などと呼ばれる神は、自己に対する不満や他人に対する羨（うらや）みの念をまきちらすだけです。しかもそれは、あなた方の人生を暗くし、つまらないものにしてしまうだけなのです。

例えば、せっかくの美しさを持っていてもそれに対して自分自身が嫌悪（けんお）の感情を持つ

なら、それだけでその美はしなびてしまって何の役に立たないものになってしまいます。いきいきとした青春時代も、じじ臭い憂いをもって過ごせば台無（だいな）しになってしまいます。

それでは何が幸せをもたらすのか。それは「自惚（うぬぼ）れ」です。この女神は、いつも私と力をあわせてくれますので、私の妹分（いもうとぶん）です。自分に喝采（かっさい）をおくり、自分に自分が感心するほど阿呆（あほう）なことがあるでしょうか。でも、自分に不満があれば、人前（ひとまへ）に出て愛嬌（あいきょう）など振りまけますか。そして歓迎されるでしょうか。「自惚れ」がなくなったら、弁舌家（べんぜつか）も音楽家（おんがくか）も役者（やくしゃ）も画家（えいがか）もみじめなことしか、みじめなものしかできなくなります。他人から喝采（かっさい）を受けたいなら、めいめいが大いに自惚れ、自分が真（ま）っ先に自分に喝采を送るようになることが必要なのです。

もし、人が幸福であり続けたいというのであれば、私（わたし）がもたらすこの「自惚れ」は十分にその便宜（べんぎ）をはらってくれます。誰もが自分の顔・精神・生まれ・身分・教育・祖国などについて不満のないようにしてくれます。その結果、自分がほかの人間になりたいなどとは思わないのです。どんな不平等（ふびんどう）をも「自惚れ」は見事に消し去ってくれるのです。「自惚れ」の量をちょっと増やすだけで人間は最高の幸福を手に入れることができるのです。

戦争（せんそう）はありとあらゆる武勲（ぶくん）の舞台（ぶたい）であり源（みなもと）です。しかし、戦争（せんそう）など結局（けつくり）のところは、敵味方双方（てきみかたそうほう）が損（そん）をするということが分かっているのに、やり始めるとは何と阿呆（あほう）なことでしょう。何人（なんにん）死（し）のうともの数（かず）にも数（かず）えません。それはさておき、そんな戦争（せんそう）の時（とき）、勉強（べんきょう）で消耗（しょうもう）し、血（ち）の気の薄（うす）い賢人（けんじん）の先生（せんせい）などどんな役に立つ（たつ）でしょう。戦争（せんそう）の時（とき）は何も考えず前（まへ）へ前（まへ）へと進（すす）んでいく、太（あぶら）って脂（あぶら）ぎった人間（にんげん）が有用（ゆうよう）なのです。武器（ぶき）を捨てて逃げ出したという過去（かこ）の賢人（けんじん）の話（はなし）は、よく聞（き）くところです。確かに、隊長（たいさう）の場合は、知恵（ちえ）も必要（ひつよう）でしょう。ただ、この知恵（ちえ）とは哲人（ていじん）に求められる知恵（ちえ）とは違（ちが）います。戦（いくさ）うための知恵（ちえ）です。これは、灯（あか）りをかかげ夜（よ）も眠（ね）らない哲人（ていじん）ではなく、盗人（ぬすっと）や強盗（きやうとう）などカス（かす）と呼ばれているような人が持つ知恵（ちえ）なのです。

最高の賢人（けんじん）とまで言（い）われたソクラテス（ソクラテス）ですが、「彼（かれ）以上の賢人（けんじん）はいない」という神託（しんたく）をした時（とき）、アポロンの神（かみ）自体（みづか）が知恵（ちえ）を欠（か）いていたのではないかと言（い）われています。彼は演説（えんぜつ）をしようとしてもみんなに笑（わら）われるので、いつもそこを立ち去（た）らねばならなかったとも伝（つた）えられています。ただ、「賢人（けんじん）とは神（かみ）のみに言（い）えることだ」と言（い）ったことや「賢人（けんじん）と呼ばれるものは国家（こくが）公共（こうきょう）に口（くち）をはさむべきではない」と述べた点は評価（ひやうか）できますがねえ。まあ、人間のうち（うち）に数（かず）えてもらうためには、賢人（けんじん）にならないほうがいいと言（い）ったほうがもっと良（よ）かったと思（おも）いますがね。第一（だいいつ）、彼（かれ）が毒人参（どくにんじん）の汁（じゅう）を飲（の）まなければならなくなったのは、まさにこの賢（けん）さのためではないですか。観念（かんにん）やらに哲学的（ていがくてき）思弁（しべん）をこらすことはできても彼（かれ）には、人の世（よ）の普通（ふつう）のことなど全然（ぜんぜん）わかっていなかったのです。

プラトン（プラトン）なんかは、ソクラテス（ソクラテス）を弁護（べんご）しようと大衆（たいしゅう）の前（まへ）に出（い）たそうですが群衆（ぐんしゅう）の騒ぎ（さわぎ）に仰天（ぎょうてん）して、用意（ようい）したことの半分（はんぶん）もしゃべれなかったそうですよ。演壇（えんだん）へ登（のぼ）ったとたんに黙（もく）りこくってしまった賢人（けんじん）もいたそうです。こんな人間（にんげん）が戦争（せんそう）のとき（とき）に兵士（へいし）を鼓舞（こぶ）できたでしょうか。その他（その他）にも、雄弁家（ゆうべんか）と言（い）われた人で臆病（おくびょう）で口（くち）すらきけなかった人（ひと）、話（はなし）をはじめ（はじめ）るやぶるぶると震（ふる）える人（ひと）さえもいました。ある人（ひと）はこれこ

そ危険を知る弁士の証拠だと言いましたが、私は賢いことが人を失敗に導くのだと言いたいのです。言葉だけの決闘（けつとう）でこれほど臆病（おくびょう）な人間に剣を手にして何ができるというのでしょうか。

プラトンは「哲学者が国家を治めるか、国家を治める人間が哲学者になるかが必要だ」と言いましたが、歴史をひもといたら哲学や文学に見識（けんしき）のある人間が治めた国ほど悪いものはありませんでした。歴史の事実がそれを証明しているではありませんか。数え上げればきりがありませんが、例えば、マルクスアウレリウスは哲学を修めていましたが、不人気でした。まあ一応は良い皇帝であったことにしておきましょう。しかし、彼が国家に対して残した福祉より以上の災難をその息子は国家に与えましたよ。自分の賢さをきわめようとする人間は、跡継（あとつ）ぎにろくな者を残さないということでへまをします。だから神は賢明であることの害悪が人間の間にはびこらないようにしているのだと思いますよ。キケロの息子も極道者（ごくどうもの）だったし、ソクラテスの息子も母親譲（ゆず）りのふうてん者だったらしいですよ。

ところで、これらの賢人も日常生活でぶざまなことさえしなければ、たとえ公共の役職についても我慢しましょう。しかし、彼らはそうではありません。彼らを食事に招きでもしようものなら、その場が陰気で退屈（たいくつ）なものになり、あげくの果てには退屈な談義（だんぎ）まで始めてしまいます。舞踏に招いたらラクダの踊りだとしか言いませんし、しかめっ面しかしないので、他の人々を興ざめさせるので、見世物小屋からも追い出されます。

みんなが楽しくよもやま話をしているところに賢人でもやってこようものなら、まるでおとぎ話の中の狼（おおかみ）と同じで、すべてを台無しにしてしまいますまた、哲学者などは、買い物をする、契約をするなどの日常生活において必要なことは何一つ自分ではできず、とても人間たるものとは言えません。まるで丸太棒（まるたぼう）です。自分のためにも他人のためにも国のためにも何の役にも立ちません。なぜなら、彼らは普通のことは何一つ知りませんし、世間で通用している慣習などには全く縁がないからです。他人からこのように切り離されているがゆえに哲学者に対する憎しみも世の中に生まれてくることになります。

日常とは、この痴愚女神に則（のっと）って、阿呆ふうてん同士の間で行われていくものなのではありませんか。たった一人で世の中の流れに逆行していく哲学者と呼ばれるような賢人は、砂漠にでも行って、一人さびしく自分の賢さを味わっていただければいいのです。

人々を敵から防衛したのは都市に集められた粗暴（そぼう）な人間たちだし、あるいは悪徳な役人に対する民衆の反乱をおさめたのは賢者の演説などではなく、たわいもない寓話（ぐうわ）を用いて分かりやすく説明した人々です。例えば、血を十分吸った蚊を身の回りから追い払わない方がいい。なぜなら、それをチャンスとして血に飢えた蚊がやってくるからだというような例え話をしたと言います。

こういうばかげたものを用いてこそ、民衆というような力の強いけだものたちを導いてゆけるのです。ギリシャの賢人のプラトンやアリストテレスの立てた掟（おきて）で、ソクラテスの教えで国が治まったことかがあるでしょうか。多くの人々が戦いの中、潔（いさぎよ）くわが命をそのためにささげたのは何のためですか。虚栄（きょえい）以外の何ものでもありません。賢人は自分の銅像が建てられ、名前が彫（ほ）られることが何の意味があるのかと言いますが、これがあるから

こそ、英雄たちの多くの偉業が存在するのです。国家も政治も法も保たれるのです。このように、この世界を成り立たせているのは、虚栄心（きょえいしん）や名誉欲に代表されるようなものです。すべては痴愚女神のちょっとした配慮によるものなのですよ。

優れた多くの知識がなぜ生み出されたり、後世に伝えられたと思いますか。それは名誉欲というものを満たすためだったのです。阿呆の人間たちは、徹夜（てつ）をして汗水たらして、名声という世の中で空（むな）しいものを手に入れたつもりになっていたわけです。しかし、この名誉欲に関わっている痴愚女神のおかげで、今我々は貴重な利便性に預（あず）かっているのです。それを利用して生活しているのですよ。

勇気や勤労の成果も名誉欲というものを人間に生じさせる私のおかげだということがお分かりになったことと思います。さらに思慮分別の功德（くどく）も私のおかげだと言ったらどう思われますか。火と水を混ぜるようなことを言うなどと言われるかもしれません。しかし、ちゃんと私の話を聞いてくださったら納得していただけることだと思います。

例えば、思慮分別がある人だと褒（ほ）められるのはどのような人でしょうか。臆病（おくびょう）で謙遜（けんそん）ばかりして、何もしようとしない賢人でしょうか。それとも危険も知らず、謙遜というものを持ち合わせないために、なにものにも勇敢に向かっている人々なのでしょうか。分かりきっているはずですが、賢人は何もしないで古代の書の中に逃げ込んで屁理屈（へりくつ）をこねる方法を知っているだけです。一方、そうでない人間は現実や危険に接して本当の分別を身に付けます。

そもそも、物事を知ることが妨げる二つの主な障害とは、心を暗くするような恥ずかしさと危険だと感じて行動をさせないようにすることではないでしょうか。ところが、痴愚女神はみごとにそれを追い払ってくれるのです。何事にも臆病になることなく、果敢（かかん）に挑戦する場合には、多くの利得が生ずる場合が多いものなのです。

また、思慮分別こそが物事を正確に評価することができるというなら、次のことをよく考えてください。思慮分別があり、物を見抜く力があると自任（じにん）している人間がどれほど現実を正しく見ていると言えるのでしょうか。なぜなら、すべてのものは二面性を持っているからです。美が醜（しゅう）をおおい、富裕は赤貧（せきひん）を知識は無知を覆い隠しているのです。頑健（がんけん）に見えるような者が実は脆弱（ぜいじゃく）で高い血筋らしいものが卑賤（ひせん）なのです。繁栄は不幸を友情は憎悪を隠しているのです。結局のところふたを開けてみたら看板とは逆のものにお目にかかるのがおちではないですか。

誰でも、王様は金持ちで権勢（けんせい）があると思っています。しかし、その王様が精神上の長所を持っていなかったら貧しい人間と言えますし、そのうえその心を多数の悪徳にゆだねていたら一介の卑しい奴隷と同じです。

たとえば、役者が舞台上演している時、誰かがその役者のかぶっているお面を引きはがして素顔をさらけ出したとしたら、その劇は台無しになってしまいます。女が男になり、若者が老人になり、王様が奴隷になり、神様がちっぽけなおじさんになってしまうのですからね。幻想（げんそう）が破り捨てられてしまうと芝居じたいがひっくり返されてしまいます。人生も同じです。各々が仮面をかぶってその役割を演じているのです。

たとえば今ここに賢人が舞い降りてきて、こいつは君主とあがめられているが、けもの同然の欲望にまみれた人間のクズだ。こんな奴にしたがっているなんて恥だとは思わないのかと。また、父の死を悲しんでいる青年に父はやっと真の生を送ることができるようになったのだから喜べ。なぜなら、彼は家系の良さを鼻にかけていた人間で、美德も何ももたないげす野郎だったんだと言い始めたらいったいどのような結果になるのでしょうか。誰もがこの賢人をふうてんとみなすでしょう。場違いなことを言う逆立（さかだ）ちした賢者ぶりほど無思慮なものはありません。目の前の物事に調子を合わせず、慣習に従わず、酒宴（しゅえん）の席で酒も飲まない、お芝居がお芝居であってはいけないというような人間はとんちんかんなものなのです。

それに対して皆さんはごく普通の一般人ですから、普通のこと以上のものを知ろうとはせず、多くの人と一緒にあってその場に合った考え方しかできません。しかし、これこそが本当の分別なのです。人生とはお芝居のようなものなのですよ。

確かに、阿呆者は情念に導かれ、賢人は理性に導かれるのだと言われます。それゆえ、ストア派の学者は一切の情念を厄病（やくびょう）として、賢者から遠ざけたのです。しかし、情念の中には人を知恵に導く教師の役割を果たすものもあれば、人間を美德や善に向かわせる刺激になるものもあるのではないですか。もっと端的（たんでき）に言えば、彼ら賢人は、人間らしい感情のない大理石（だいりせき）のような人間を造ろうとしているのではないですか。そのような賢人は、観念の国なりに住んでもらえばいいと思います。

あらゆる自然な感情に心を閉ざし、愛情にも憐憫（れんびん）にも心動かされず、決して間違わない。自分だけに満足し、友達を必要とせず、他人を阿呆として嘲笑（ちょうしょう）を浴びせる。観念の国とは、そのような国家なのです。これが、彼らの言う完璧（かんぺき）な賢人なのですか。恐ろしくて、逃げ出したくなるような怪物ではないですか。

そんな賢人を自分の指導者に友に伴侶（はんりょ）に主人にしようとする人がいるのでしょうか。愉快で楽しく暮らせるような、優しく、人間のことを他人ごとなどとは思わない、そんな人間こそともにいるべき者なのではないですか。賢人などもたくさんで、うんざりです。もっと愉快的話をしましょう。

人間は恥ずかしい生まれ方をし、幼少期には教育を受けることに苦しみ、青年期には過酷（かこく）な労働を強いられ、老年期には病気に苦しめられ、一生を台無しにされたあげくに死なねばならないのです。それだけではありません。人間社会には、貧困・投獄（とうごく）・汚名・恥辱（ちじょく）・はかりごと・密告・侮辱（ぶじょく）などきりが無いほどのいやなことがあります。なぜこのようになったのかは別問題として、このような中で生きていて、いやになって自殺した人とはどのような連中でしょうか。それこそ、英知をそなえた賢人といわれる人間たちではないのでしょうか。もしこの世にいるのがすべて賢人だったら、人間なんて神がいくら造っても足りなくなるのではないですか。

ところが私は無知と軽率（けいそつ）さで人間にそのみじめさを忘れさせることができるのです。そして時折、快樂を与えて幸福を味あわせ、その人生を去りがたく思わせ、生にしがみつくようにさせるのです。

歯が抜け、頭がはげ、猫背（ねこせ）になり、汚くなっても、陽気に人生を味わおうとする人こ

そ私の得意とするところの人なのです。老人たちは若返りと称して、髪を染め、かつらをかぶり、義歯をはめ、ひん死の身でありながら小娘（こむすめ）を好きになるのです。うぶな若造そこのけの狂気ざたなのです。自分は冥土（めいど）に片足突っ込みながらも、若い娘をめとろうとします。まさに狂気ざたなのですが、ご本人はいたって得意げなのです。

地獄から戻ってきたような屍（しかばね）同然の梅干しばあさんたちが、口を開けば「人生は楽しいわ」と言っています。これほどおもしろいことはありません。これらの婆さんは、金にものをいわせて若い男をたらしこみ、おもしろいを塗りたくり、しなびた乳房を出して、酒を飲んだり、若い娘に混じって踊りをしたり、恋文を書いたりするのです。誰もがこのような婆様をバカ呼ばわりするのですが、彼女らは今の自分に満足していて、快樂、あらゆる喜びを味わっているのです。これこそ私、痴愚女神のおかげなのです。

このように狂っているようにも見えるが楽しい生活を送るほうが、首をくくるための木の枝を捜すよりずっといいのではないですか。彼女らは他人から不真面目（ふまじめ）だと言われようと全くおかまいなしです。彼女らは自分が不真面目だとは思っていないのです。頭に石がぶつかるのは苦痛ですが、恥とか不名誉とか罵声（ばせい）を浴びせられるとかは、本人がそれを苦痛だと感じれば苦痛となりますが、感じなければ苦痛でもなんでもありません。みんながよってたかってやじっても、あなたが得意になれば何でもないことなのです。この痴愚女神だけがあなた方をそのようにさせることができるのです。

しかし、このように言うと哲学者の先生方は、「痴愚女神に支配され、無知に陥っていることこそが不幸だ」と言われるかもしれません。いや違いますよ。これこそが人間らしい人間なのです。

人間この世に生まれて、みんなと同じように育ち、みんなと同じように生活して何が不幸だというのですか。あるがままの人間でいて不幸なことなど何もありません。鳥のように空を飛ばないとか、獣（けもの）のように四本足で歩けないとかメス牛のように角がないから情けないと言うのなら別として、いったい、どこが不幸なのでしょう。馬が文法を知らず、お菓子を食べられないからといって不幸ですか。牛が体操ができないからといって不幸ですか。それと同じように痴愚だからといって人間は不幸ではありません。いや痴愚こそ人間の本性にぴったりとしているのです。

ところが屁理屈（へりくつ）をこねる賢人は「学芸の知識が人間だけに与えられているのは、自然が人間に対して与えていないものを、人間自身はその力で手に入れるための手段である」と言います。他の動植物には十分尽くしてきた自然が人間だけに対しては手を抜いたため、人間は学芸の力を借りて、手抜き穴を埋めなければならなくなったというのです。

しかし、学芸というものは実際はあまり幸福には役立ちませんね。文字が発明されたことで、ある王様がこれにより人間は記憶することを怠（おこた）るようになると言いました。まさにそのとおりです。学芸というものが人間に災厄をもたらしたのです。

はるか昔の黄金時代と呼ばれていた頃には、人々は学芸など身に付けていませんでした。自分の本能にだけ従って生活していればよかったです。今のように言語が多数存在していませんでしたから、文法は必要ありませんでした。反対意見があっても、論争することなどなかったので論証法なども必要ありませんでした。訴訟（そしょう）もなかったので修辞学（しゅうじがく）も必要ありませんでした。悪い風俗もなかったので法律学も必要ありませんでした。当時は信仰心も深かったので、自然の神秘に不貞（ふてい）な好奇心（こうきしん）を寄せることもなく、天体の運行やその影響を測定したり、宇宙の神秘（しんぴ）のからくりを探ろうとすることもありませんでした。一介（いっかい）の人間の身分以上のことを知ろうとすることは、罪になると考えていたのです。大空のかなたをながめるなどは、狂気のさたで誰の心にも浮かびませんでした。

ところが、時代を経（へ）るにしたがって、この黄金時代の純潔（じゅんけつ）さが失われ、悪霊（あくりょう）たちが学芸というものを創造してしまったのです。初めはそれはわずかのものであり、それを修める人も少なかったのですが、後になるとギリシャ人たちが、いやというほどたくさん学芸を積みあげていったのです。そのため、文法の研究だけで一生を責めさいなまれ、その生涯を終える人さえも生じるようになったのです。

とはいえ、学芸についても喜ばれるものもあります。それは常識つまり痴愚女神に一番近いところにあるものです。もちろん、神学・物理学・占星学（せんせいがく）・論理学などではありません。医学がその一つです。ただ、これといえども、一番でたらめで間拔（まぬ）けで無知なものが世間の信用を集めているのが現実ですがね。そして法律家も喜ばれるものの一つです。一応重大な事件もつまらない事件も収めていますからね。このつまらない者たちが活躍する領分はどんどん増えていることは確かです。

それでは、神学者はどうでしょうか。彼らは、豆を食べながらシラミと食うか食われるかの戦いを続けているのが現実です。まあ痴愚女神に近い学芸は、かろうじてまだましなのですが神学を学ぶものはこのように悲惨（ひさん）です。学芸とは全く関係を持たず、自然に従って生きている人々こそが一番幸福なのです。人工に汚（けが）されていないものこそが繁栄することができるのです。

みなさんは、一番快適な生活をしているものとは、教育など受けずに自然だけに教え導かれているものだとは思いませんか。たとえばミツバチです。彼らほど幸福なものはないでしょう。ミツバチの感覚はわれわれと比べればはるかに限られています。その建築技術にわれわれは到達できるでしょうか。またあのような国家の仕組みを哲学者は実現できるでしょうか。

それとは逆に人間と同じような感覚を持っている馬はなんと不幸なことでしょう。人間とともに暮らし、われわれと同じような悲惨さをなめさせられているのです。競馬においては追い抜かされないために精魂（せいこん）を使い果たし、戦闘では勝利するために勇敢に戦い、体を刺されたり、乗せている主人とともに土埃（つちぼこり）にまみれます。そして窮屈（きゅうくつ）なはみをかまされ、馬車を引きずらされ、馬小屋にとじこめられ、鞍（くら）をつけられ、鞭（むち）で撃たれます。もしそのことで人間に復讐（ふくしゅう）を試みれば大変な目にあわされるのです。

それに比べれば、人間に待ち伏せされない限り、自然の本能のままに生きているハエや鳥のほうがどれだけ幸福かわかりません。しかし、その鳥もかごに入れられ人間の声を真似（まね）するよう教え込まれると、たちまちにその生来の美しさをなくしてしまいます。自然は人為（じんい）に粉飾（ふんしょく）されたものよりはるかに勝っているのです。人間というものは生物の中で最も悲惨な生き物です。その理由は、どの生物もその本性の分限（ぶんげん）に甘んじているのに、人間だけがその分限を越えようとしているからだとは思いませんか。

また、人間たる者は学者や権力者ではなく、無知蒙昧（むちもうまい）な連中のほうが好ましいと考えます。なぜなら聡明（そうめい）で注意深い英雄は、自らの賢さのために自然の意見には全く耳をかそうとしないからです。あらゆる人間の中で知恵を目指すものほど幸福から遠く離れてしまうのです。彼らは至高（しこう）の神々に成り上がろうとして学芸を武器として自然に戦いをいどむのです。それに対して動物らしさと愚かさに近寄り人間の限界を越えようとしなない人が幸福なのです。

俗に阿呆（あほう）だとかうすのろだと呼ばれている人々ほど幸福な人々はいないのです。こんなことを言ったら、ばかげていると思われるかもしれませんが、これが現実なのです。なぜなら、まず、第一に彼らは死を恐れませんが、また良心の呵責（かしゃく）に悩むこともありません。お化けの話の聞いても怖がることなどありません。亡霊（ぼうれい）や化け物に怖（こわ）がることもありません。恐ろしい不幸に対する不安もありませんし、将来の幸福に対する度を越えた期待もありません。その人生において、憂慮（ゆうりょ）に苦しめられることはないのです。屈辱（くつじょく）も野心も羨望（せんぼう）も知りません。無自覚であるがゆえにそのような人々には罪という意識が生じないのです。

さて、賢人先生。あなたがいただく不安によってあなたの魂がどれだけさいなまれているか考えてみましょう。その生活の憂いがどれだけあるか目の前に積み上げてみれば分かることだと思

ます。そうすれば、私がこの阿呆どもからどれだけの苦しみを逃れさせているかわかると思います。

この阿呆たちは、自分たちの時間を遊び、ふざけ、笑い、歌って過ごすばかりか、どこへ行ってもその楽しみ、遊び、おもしろさ、陽気をもたらしてくれます。彼らは物悲しい人間生活を陽気にする役目を果たしてくれてもいるのです。だから同胞（どうほう）から友人として認められ、ちやほやされ、ごちそうされ、大切にされ、助けられ、何を言おうと許されるのです。誰も彼らを傷つけようとはしません。野獣（やじゅう）さえもこのような人間は自分に対して無害であるということが本能的に分かっていますから、危害を加えることなどありません。こういう人は、私の庇護（ひご）のもとにありますから、当然のこととしてあらゆる人々の尊敬を集めます。

王様たちもこういう連中を高く買われており、彼ら無しには食卓にもつく気にならず、かた時とも彼ら無しにはすまされない状況にあります。王様たちは、みえをはるために養っている賢人よりも、これらの道化師（どうけし）のほうを大事にされます。なぜなら賢人たちは、王様の繊細（せんさい）な耳を辛辣（しんらつ）な真理で傷つけ悲哀（ひあい）を味あわせるだけだからです。

しかし、道化師どもは、王がいかなる代償（だいしょう）を払ってでも手に入れたいと考えている娯楽・微笑み・歓楽（かんらく）を与えてくれるのです。さらに、彼らは誠実で率直です。阿呆には嘘いつわりはなく、真実しか述べることができません。思っていることはすべて表情にあらわれます。ところが賢人は二枚舌（にまいじた）を持ち、状況に応じてそれを使い分けます。彼らは、黒を白ということもできますし、心の中と一致しないことを平気で言うこともできます。

王様は真実を聞く術（すべ）を持たず、追従者（ついしょうしゃ）の言うことだけを聞かされ、真実から遠ざけられているといわれますが、私もそれは実に気の毒なことだと思います。しかし、次のような反論もあるでしょう。王公の耳は真実を恐れていて、王が賢人たちを避けるのは、彼らから聞かされるのは真実で率直なことであり、それを聞かされるのが怖いからだと言われます。私もそれを認めないわけではありません。しかし、実は王様は賢人たちのふるまい自体が嫌いなのです。阿呆たちも王様に真実を述べますが、彼らは王様をののしりながらも彼を楽しませることができなのです。阿呆であるからこそ、それが可能なのです。同じことを言っても、賢人が述べたことなら死罪を免れえないことでも、阿呆が口にすれば王様は喜んでくれます。だから、神々は阿呆だけから真実を伝えられるのです。

また、阿呆どもはご婦人方にも気に入られています。ご婦人がたは軽はずみでうわついていますから、何をしても冗談ぐらいにとってくれるから彼らが大好きなのです。まあ、ご婦人がたは、自分の失敗を隠すのがうまいということも言えますがね。阿呆どもは一生を快適に過ごし、死を恐れる感情を持つこともなく天上界にいきます。そして、そこでも人々を道化で楽しませませるのです。

ここで阿呆の一生と賢人の一生を比較してみましょう。賢人と呼ばれる人々の一生とはどんなものでしょう。青春期は、学問の研究で時間を使い果たし、その最も麗（うるわ）しい時代も徹夜や憂いや悩みで台無しにし、残りの生活もほとんど楽しみすら知らず過ごすのです。こんな人間は、けち臭く陰気で、めそめそしていて、自分に対して厳格（げんかく）であるがゆえに他人にとっても我慢（がまん）ならない人物であるのです。青白い顔をして、瘦（や）せこけ、目やにだらけ

で禿（は）げ頭で早死にするのです。まあこんな人間はもともと生きていたとは言えないので、いつ死んでもどうということはないですが。これが賢人先生の姿なのです。

こんなことを言えば、ストア派の学者どもが、阿呆こそ狂気であり、狂気こそ最高の不幸だと言われるかも知れません。しかし、狂気にも二種類のものがあるのです。一つは、戦乱への熱狂、黄金への渴望（かつぼう）、不真面目な痴情（ちじょう）、親殺し、近親相姦（きんしんそうかん）などですが、もう一つの種類のもは、私、痴愚女神から出てくるもので、この世に願わしいものです。この狂気は快い幻想（げんそう）でもって魂を憂いから自由してくれるのです。さまざまな形の逸楽（いつらく）を味あわせてくれてあらゆる不幸を忘れさせてくれるものです。

普段の生活では情あつく、妻には優しく、召使いには心ひろいある人間がいました。彼は、何も演じられていない舞台を見ては、世にも見事なお芝居がなされているという気分になって笑い、喝采（かっさい）し、喜んでいたので。このような人間を幻想をいまく狂人だとして、目を覚（さ）まさせようと思いました。するとその時、その男は自分は殺されたも同然だと言ったそうです。なぜなら、楽しさや、歓喜が自分から逃げ去ってしまったと嘆（なげ）いたので。私に言わせれば、こういう狂気を病人扱いして薬攻めで治した人こそ、薬のお世話にならなければならないのではないかと思います。

もちろん、感覚や精神の錯乱（さくらん）から判断力もとんちんかんになり、それが度を越え、いつまでも続いたらそれは私の言う望むべき狂気ではありませんが、騾馬（ろば）がいな鳴くのを聞いて合奏曲（がっそうきょく）だと感じ、賤（いや）しく貧しい身分に生まれながら王に生まれたぐらい思っている人などが私がお世話した狂気なのです。このような狂気は、当人にとっても周りの人間にとっても楽しい事ですよ。また、身の回りに思っている以上に多く存在しているものなのです。狂人同士がお互いに笑いこけているのですよ。

私に言わせれば、狂人になればなるほど人間とは幸せなものなのです。ただ、それは私の領分に関わるものに限られますがね。ただし、その領分とは恐ろしく広いものなのです。人間であらゆる時期を通じて、私の狂気と全く関わりを持たない人などまずいないでしょう。かぼちゃを女だと錯覚する人はほとんどいませんから、もしそのような人がいたら一般の人からは狂人扱いされます。しかし、私の領分内のことで、例えば、自分の細君がたくさんの情夫を持っているのに、自分の妻こそ世界で最高に貞潔な女だと思っている人などは多くいて、一般の人が彼を決して狂人とは言いませんよね。

また、角笛（つのぶえ）の音や猟犬の吠える声を聞いて幸福を感じ、犬の糞（ふん）の香りを香水のように感ずる狩猟気遣（きちが）いもいます。牛や豚のトサツに関わる人間を賤民（せんみん）扱いをするくせに、一方では、とらえた獣をズタズタにするのにうっとりとし専用の刃物を持ち、獣を追い立て、それを食べるのです。本人は野獣とそれほど変わらないのに、自分はまるで王者にでもなったような気持ちになるのです。

石材に夢中になって、今日は丸い建物を四角に変えたかと思うと、翌日にはその四角くした建物を丸くする人々も同類です。建てたり壊したりと、とめどがありませんから、ついには破産して住むところにも食うものにも困ることになります。しかし、本人は全くおかまいなしに幸福です。また、元素の性質を変えようと試みたり、新しい元素を発見しようと躍起（やっき）にな

っている人々も同じです。この連中は絶えず希望を心に抱き、いかなる努力も費用も惜しみません。いつも何かすばらしいことを想像しています。そして、それらに惑わされてはいるのですが、全財産をそれらに注ぎ込み、最後には何一つ新たなものをつくるお金もなくなってしまう。しかし、このような状況になっても、その夢を捨てるどころか、他人にも同じような福楽（ふくらく）を味あわせようとするのです。夢を実現するには自分の寿命は短すぎたとなくさめるのです。

賭博（とばく）好きな人も見ていて笑い出したくなります。こてんぱんになってもなおも今度こそ人をペテンにかけてやろうとします。痛風（つうふう）になって、関節がひん曲がってもサイコロを振り続けるのです。怒りで終わらなければ賭け事も私の領分でしょう。

また嘘でかためたような奇跡の物語を話したり聞いたりするのが好きな人々もいます。このような人々も私の領分です。こういう人々は亡霊だとか、死霊だとか地獄の悪霊だとかとほうもない作り話を持ち出しますが、このような話は、いくら聞いても聞きあきることがありません。話が嘘っぽければ、嘘っぽいほど人はそれを信じ込み、いい気持ちになるのです。このような話は人の心に安らぎを与えてくれるのです。

ある彫像（ちょうぞう）や画像を拜んでおけばその日に死は訪れないと確信している人々や呪文（じゅもん）を唱えれば戦死することはないとか祈祷（きとう）すれば金持ちになれるとか信じ込んでいる人もいます。彼らも私の仲間なのです。犯した罪から地獄にとどまる時が少しでも短くなるお許しの札を得たと喜ぶ連中はどうでしょうか。ペテン師が作った祈りですべてが手に入れると思いきこんでいる人々はどうでしょうか。まあ、こういう連中は、この世の楽しみがなくなってから始めて天国の福楽に向かって神頼みを始めるのですがね。悪党連中もほんのわずかの供物で、一切の罪が拭（ぬぐ）い去られ、また悪党の続きができると思いついでいるのです。

毎日、詩を7編唱えれば幸福になれると信じている、バカないや幸福な人間もいるのです。さすがここまでとなると私も恥ずかしくなってきましたが、何もこのようなことは、一般の俗人だけのことではなく、宗門（しゅうもん）の先生方もそうなのです。どの国も望みをかなえてくれる自国の聖人を持っています。各々の聖人が歯の痛みを治すとかお産の苦痛を和らげるとか家畜の群れを保護するとかの独特の力を持っているとされています。複数の力を持っている聖人もいます。特に聖母マリアには、キリスト以上の力があるとされています。

ところで、これらの聖人から授けられたいと人々が考えていることで私、痴愚神に関わらないものがあるのでしょうか。神社に壁から天上までつりさげられた絵馬（えま）を見たらわかるでしょう。少しでも真剣に努力して、その結果、賢くなれますようにと願っているようなものがありますでしょうか。どれもこれも、そのような真面目（まじめ）なものではありません。格闘（かくとう）のすえに助かったことを感謝するとか、戦闘で自分だけが逃げ出したのに、勇気があったから助かったのだとして感謝するとか、盗賊だったのに罪を許され感謝するだとか、不貞の妻から毒を2種類も飲まされたことから偶然両方が体外に出て助かったとか、私に関わるものばかりです。馬車が転覆したにもかかわらず無事、馬を家まで連れ帰った男、崩壊した家の下から無事助け出された人、情夫の亭主に押さえられながらも逃げおおせた男もおります。これらの連中は、痴愚神から逃れたとあって喜ぶような人間では決してありません。阿呆になることは実に楽し

いことなのです。人々はいろいろなものから解放されたいと願いますが、この痴愚神からだけは別ですよ。

ところで、キリスト教徒の平生の生活も、実はこのようにキテレツなことではいっぱいなのです。また司祭たちもこのことを当然とし、このようなものがなくならないように努めているのです。なぜならこれらが彼らに多くの利益をもたらすことを知っているからです。もし、このような連中の前で賢人が、「正しく生きなさい。罪を償（つぐな）うならお金ではなく、涙、祈禱（きとう）、断食をなさい。そして自分の行いを改めなさい。」というようなことを繰り返し述べたとしたらどうなると思いますか。みんなの魂をせっかくの幸福感からむしりにとって、混乱におとしいれることになってしまうだけなのですよ。

先に進みたいのではありませんが、どこからどのように見てもてもみじめなその日暮らしの人間と何ら変わるところはないのに、生まれの良さだけを鼻にかけて、やたら自尊心だけは強いが、この世にとって何の役にも立たない貴族の位の人たちのことを言わないわけにはいきませんね。

貴族という連中は、何かにつけて自分の祖先はある有名な場所に住んでいた偉い人間であったと言うし、祖父母は名のよく知れた者だと言って古臭（ふるくさ）い家名を並べ立てます。また部屋のあちこちに、先祖の肖像画（しょうぞうが）や彫刻を飾（かざ）っています。しかし本人といえば、この世で何の役割も果たしていない石の像のような人間です。並べ立てられた絵画も塗られた絵具にすぎず、それ以上の値打ちなど何もありません。

しかし、彼らもその自惚（うぬぼ）れ心のおかげで幸福に暮らしています。またこんな奴らを神々のように思う同じようなアホな人間がたくさんいます。しかし、そんな彼らにもあらゆるところでこの自惚れ心が幸福をまき散らしているのが事実です。

外見はとても美しいとは言えない男なのに自分は世にもまれな美男子だと思っている男、コンパスで三本の線を引くことができるというだけで自分は大数学者だという人もいますし、ガラガラ声で音痴（おんち）な歌しか歌えないのに美声の歌手だと信じている人などもそうです。

自惚れに匹敵するもう一つのアホがあります。それは、実は自分ではなく召使（めしつかい）にさせていることなのに、それを鼻にかけてそれはさも自分のおかげだとしている連中です。なにか、しゃれた話をしなければならぬ時には、召使をそばに置いて耳打ちさせたり、自分は弱くすぐ負けてしまうのに、体格のよい召使をあてにして相撲大会があればしゃしゃり出る人などがそうです。

技芸を持っていると言われる人々についてもこれらと大差はありません。大したこともない才能なのに、それを人に教えるくらいなら田畑を手放したほうがまだましだという人もいます。俳優・歌手・雄弁家・詩人などと呼ばれている人々に多くいますが、まあ、一般的に値打ちのない才能しか持たない人間に限って自惚れが強く横柄（おうへい）なのです。またそういう人間に限って世間では賛美されるというのが世の常ですがね。まあ、多くの人が痴愚女神の奴隷だから、最も悪い奴が人気を博するのもやむをえませんがね。一番下手なやつが一番称賛されるので、本当の知識を得ていったい何になるのかと考えたくもなりますよね。まあ、本当の知識を身に付けるのは困難ですし、また手に入れたところでそれはそれで退屈で臆病な人間を作りあげるだけですし、本当の知識を身につけているからといっても、ほんのわずかの人間にしか認められないのが現実なのです。

自然は、この自惚れをどこの国、どの都市の人間にも持たせて生まれさせてくれました。その結果、イングランド人は風采（ふうさい）のよさとか、音楽上の才能とか、おいしい食事を出す才能があると申しますし、スコットランド人は血筋が高貴（こうき）だとか、王室と姻戚（いんせき）関係があるとか議論上手とかを自慢します。フランス人は優雅（ゆうが）であるとかパリは神学の都市であるとか言いますし、イタリア人は文学と雄弁は自分たちのものだと言い、野蛮でない唯一の国民だと鼻にかけます。また、ローマ人は今でも古代ローマの夢を見て恍惚（こうこつ）としています。ヴェネツィアの人々は、自分たちは高い血筋の出であると言いますし、ギリシア人は古代の英雄の称号（しょうごう）を自分たちは引き継いでいると言います。トルコ人は、自分たちこそ最

上の宗教を持つ者だと自負し、キリスト教徒を嘲笑（ちょうしょう）して、迷信の徒扱いをしています。ユダヤ人は今もメシアの到来を待ち望んで、モーセを祭りあげています。イスパニア人は武勇（ぶゆう）の誉（ほま）れでは誰にもひけをとりません。ゲルマニア人は背が高いことと、魔術が使えることを得意としています。これらのことから、自惚れがどれほど多くの人々に喜びをあたえているかお分かりになることでしょう。

またこの自惚れ心には追従という妹がいて、これが、この自惚れ心にひじょうによく似ているのです。自惚れ心は自分を撫（な）でさすり、追従は他人を撫でさするだけの違いですからね。追従とは、犬が人間にじゃれ付きリスがまとわりつくのと同じことです。このようにしてそれらは人間の友となるのです。虎（とら）やライオンが人間に対してそんなことをしてくれますか。

追従にもいまわしいものはありますが、私の管轄（かんかつ）する、追従とは好意と無邪気（むじゃき）から生まれるもので、美德に近いものです。これは、沈んだ心を元気にしてくれますし、悲しみを和らげ、怠け者に刺激を与え、病人の苦しみを和らげ、怒りの心をしずめ、恋する人々を近づけ、人の心をほころばせ、きつい言葉も柔らかい言葉にしてくれるものです。要するにどの人間もお互いに楽しく大切なものと思われるようにしてくれるのです。これこそが、幸福にとって大切なものであり、お互いがお互いを撫であうようなものです。追従とは、雄弁の一部になっていますし、医術の大きな部分を占めていますし、詩歌では最高の部分たなっているのです。人間のあらゆる関係に添（そ）えられる蜜（みつ）であり香料なのです。

一方、追従とはだまされることであり、人にだまされることは不幸なことだという人もいるでしょう。いえ、違います。だまされないほうがはるかに不幸なのです。幸福は事物そのものの中にあるのではなく、人間がそのものに対して抱（いだ）く思いの中にあるのです。人間の世界とはひじょうにあいまいでいいかげんなものです。いつも真実を明瞭に把握できると考えるのは傲慢（ごうまん）ではないでしょうか。もし誰かが真実を把握したとしても、その時その人は人生の大半の喜びを犠牲（ぎせい）にしたうえでのことだと思います。人の心とは、真実ではなく嘘に引き付けられるようにできあがっているのです。教会のお説教を聞きに行けばすぐわかることです。まじめなことが話されている時は、人はあくびをし、居眠りをしますが、おとぎ話に近いものが話される時は、人は聞き惚（ほ）れるものです。人はペテロやパウロでなく、寓話（ぐうわ）に近い聖人離れした人の話になると、断然（だんぜん）聞き耳をたてるものなのです。

幸福などというものは、誰でもわけなく簡単に手に入れることができるものなのです。文法を身に付けるのは並大抵（なみたいてい）の苦勞ではありませんが、寓話などは誰でもすぐ作れるものです。寓話は知識以上に人々を幸福にします。

ある人間は、他人には臭くて我慢できないような塩漬魚を食べます。本人がそれをおいしいものだと思っていれば、それがおいしい食べ物なのです。たとえ豪華（ごうか）な食事でもその人が、その食べ物に胸がムカムカすると思えばおいしくありません。どんな質素なものでもおいしく食べられればそれがいいのです。醜（みにく）い女でもそれが絶世（ぜっせい）の美女だと亭主が感じているならそれでよいし、どんな高い絵でも、それを見て楽しくなければただの模様ですが、でたらめに色を塗りたくったよう絵でもすばらしい絵だと感じているならそれが幸福をもたらすのです。いくら大金を払って有名画家の絵を手に入れても、それが素晴らしいものだと感じるこ

とができなければ決して幸福ではありません。

ある亭主が細君（さいくん）に偽（にせ）の宝石をさも高く貴重な宝石と信じ込ませて送りました。細君は大喜びでそれを大事にしまい、亭主は出費をまぬがれたわけです。両者に何か不都合（ふつこう）でもありませんでしょうか。

プラトンは洞窟（どうくつ）の比喩（ひゆ）の話をしました。洞窟の壁に映ったものを見て満足している人と、洞窟を出てあるがままのものを見ている賢人との何か違いがありますか。黄金色の夢を永久に見て金持ちになったつもりでいる人は幸福ではないですか。思い込みさえあれば人間はいくらでも、わけなく簡単に幸福になれるのです。

ところで、どんな幸福でも他人と分かち合わねばおもしろくないものですね。賢人には、分かち合える友がほとんどいません。また、バックスの神がもたらす酒による酔いは憂いを追い払ってくれますが、酔いがさめると同時にすぐ憂いは舞い戻ってきます。しかし、この私がもたらす幸福は、これに比べればはるかに完全で徹底したものです。まさに人間の魂を陶醉（とうすい）の中に漬け込んでしまうのですからね。交換条件など、何一つつけずに私はそれをさしあげるのです。そのうえ、ほかの神々と違い、私は誰一人としてのけものにせずあらゆる人にこの喜びを与えるのです。ほかの神々は、ひいきした一部の人間に対してだけしかそれを与えようとはしません。美も雄弁も富も手に入れることのできる人間はほんの一部に限られます。すべての人に幸福を与えることができるのはこの痴愚神だけなのです。

私は、人々に誓いを立ててもらいたいとは思いません。お祈りの最中に手ばかりがあっても怒りなどしませんし、償（つぐな）いのためのお供え物をしてくれとも言いません。私をほったらかしにしてほかの神々を祈っても罰など与えませんし、犠牲の臭いをかがせなくても天変地異（てんべんちい）は起こしません。このようなことになるとほかの神は実に気難（きむずか）しいのです。そんなものはほっておいて相手にしないのが一番いいのです。気難しい人間は相手にしないのが一番いいというのと同じです。

そんなことを言ったって誰もお前に供物を与えるものはいないし、お前のためにお寺を建てるものもないとおっしゃいますでしょう。まさにそのとおりです。まあ、このような恩知らずの人々には驚かされますが、私はいたって寛大（かんだい）ですし、一向に気にしていません。どうぞお好きにしてください。第一、供物などというものはいったい何の役に立つでしょう。人々の中に私が宿り、その生活が私の姿どおりになっているのを見るにつけ、人々は私に敬虔（けいけん）に仕えているのだと思い、それが私の喜びなのです。

私が受けているような崇拜（すうはい）は、キリスト教徒の間ではあまり見られませんね。聖母マリアに昼間から役に立たないような小さなろうそくをかかっている連中はわんさといいますが、彼女の貞潔（ていけつ）・愛情などをまねようと努めている人は何と少ないことでしょうか。そうすることこそが、天にいる者にとっては快い崇拜なのですがね。

私は、神社や彫刻の像を欲しがりません。この宇宙全体が私のものですからね。あらゆるところに私の信者はいるのです。私は、自分の彫像や画像を要求するような阿呆（あほう）ではありません。むしろ人間の数だけ、この世の中に私の彫像があるようなものです。馬鹿者や無教養なものが、神のかわりにそのようなものをあがめるのです。だから私は、他の神が決められた日にあがめられ

るといってうらやましいとも全然思いません。

私の言っていることが間違いで、思い上がりだと言われるなら、一緒に人間どもの生活を調べてみましょう。人間がどれほど私に借りがあり、私に敬意を払っているかがはっきりしてくるでしょう。

天上界から人間界を眺めれば、実にいろいろな人間がいるのが分かります。好かれてもいないのに、つまらない女に熱をあげる男、妻をめとるのではなく持参金（じさんきん）をせしめるのが目的の男もおりますね。自分の女房に売春（ばいしゅん）をさせる男がいるかと思うと、絶えず嫉妬（しつと）の目を光らせ女房を監視（かんし）している男もいます。葬式で泣いてくれる人を雇う人間がいるかと思えば、義理の母親の墓の前で泣いている男もいます。破産するまで食べ続ける人間もいれば、眠っていて何もしないことが幸福だと思っている男、隣人のことでは騒ぎまくっているのに、自分のことについてはほったらかしの男もいます。借金でどうにか暮らしているのに、自分は金持ちだと思っている人間、自分はスカンピンなのに、跡取りを金持ちにするために必死な人間、また一攫千金（いっかくせんきん）を夢見て、金では買えない自分の命を失いかねない危険にさらしている人間もいます。また、のんびり休んでいるよりも戦争へ出て一山当てようとする男、金持ちの老婦人におべっかを使って金持ちになろうとする男、などあげればきりがありません。まあペテン師が逆にペテンにかけられたのを見ると大笑いしてしまいますがね。

特にげすな輩（やから）は商人です。彼らは卑しい仕事をきわめて不誠実な方法で行っています。平気で嘘をつき、物をくすね、ちよろまかし、他人を欺（あざむ）きます。しかし、それでもその指にはまっている金の指輪のおかげで、人々の尊敬を受けられるぐらいに思っています。またごますり人間が、人前で彼らを「殿様」などと呼びますが、彼らはただそのお金を分けてもらいたいがためなだけですがね。

さらに、財産は共有すべきであると言って、他人が管理していないなら、何でも自分のものにしてしまう人さえいます。金持ちになりたいと思っているだけで、金持ちのつもりになっている人もいますが、楽しい夢を見ているので幸福ですね。ある人は外では幸福に見られたいと思って、家の中では飢え死に寸前の生活をしている人もいます。持っているものを大急ぎで使い果たそうとする人間がいるかと思えば、しこたま貯める一方の人間もいます。世間的な名誉を得たいと骨身を削る人がいるかと思うと自分の家の炉辺（ろべた）にへばりついているだけの人もいます。何か目新しい計画に血まなこになる人もいれば、壮大（そうだい）なことばかりに夢中になる連中もいます。やれエルサレムやローマや聖地の巡礼に必要もないのに行きながら、女房子どもはほったらかしの人もいます。

もしあなたがたが月から地球を見たら、人間の生活は、まるでハエや羽虫（はむし）どもがぶつかり、争い、罨（わな）をかけ、ちよろまかしあい、飛んだり、跳ねたりしながら生きたと思えばすぐ死んでしまうように見えることでしょう。戦争でも起ころうものなら、疫病（えきびょう）でも蔓延（まんえん）しようものなら何千人が一瞬に消えうせることだってあるのですからね。

けれども、このように人間どものバカさかげんばかりを話していたら、この私自身が一番の気遣（きちが）いということになりますね。そこで今度は、いかにも賢そうな人間、黄金の杖（つえ）つまり知恵を求めている連中の話をいたしましょう。その人間どもの最初にあげられるのが文法

学者と呼ばれる連中です。もし私が彼らに関わっていなかったら、彼らこそ、世の中で一番悲惨（ひさん）で神々に憎まれる人々になったでしょうね。

彼らは、昔からいくつもの呪（のろ）いや不幸にのしかかられていると言われていています。彼らは学寮（がくりょう）と呼ばれるところに来る日も来る日もがつがつ腹を減らして、垢（あか）まみれになって、わめきちらし、つんぼになって、悪臭と不潔を振りまいているだけなのです。そこは、まるで徒刑（とけい）者が載っている舟のありさまで、そしてそこで彼らは、過労のあげく老いぼれてしまうのです。

しかし、私はこういう人間にも幸せを与えてやっているのです。それは自分こそ一流の人物だと思っていられるような幻想（げんそう）を持たせることなのです。まず、こういう人間は、生徒をいかめしい目つきや大声で震（ふる）え上がらせる時や木べらや鞭（むち）で打ちすえる時や我を忘れてあらゆる激怒に身をゆだねる時などは、なんとまあ得意になっていることでしょう。一方自分たちの不潔（ふけつ）さにもかかわらず、自分たちは優雅（ゆうが）であると思ひ込み、自分たちの臭いも花のように良い香りだと思ひこんでいます。そのみじめな奴隷のような身分も国王と変わらないと信じ込んでいるのです。

そのうえ、彼らの一番の幸福は、自分たちの知識を誇（ほこ）らしげに人々に披露（ひろう）している時にあります。子どもたちの頭にばかげたことを詰め込み、自分は偉いつもりでいます。また生徒の母親や父親にまで、自分はかくなるすばらしい人間だと信じこませるのです。こういう学者先生どもは、腐（くさ）れ果てた羊皮紙の上に書き残された名前とか苔（こけ）むした石のかけらから碑文（ひぶん）の断片を見つけ出しては大喜びします。まるでアフリカでも征服し、バビロンを占領でもしたようなあんばいです。何の血の気も通っていない、世にもばからしいヘボ詩を自分で持ちまわって感嘆してくれる人間を捜しまわっているのです。仲間同士で、お互いほめあうのも彼らの喜びです。しかし、誰かが誤って批判めいたことでも言おうものなら、あらゆる敵意、罵詈雑言（ばりぞうごん）をむき出しにします。

私は、その才能にひいでた60才くらいの文法学者を一人知っています。彼は20年間一切の楽しみを放棄（ほうき）して文法学に専念してきました。彼にとって、他の人にはどちらでもいいような八つの品詞を定義できたら、それだけで何事にも代えられない幸福感を得ることができるのです。なんととっても誰も完全に成し遂げられなかったことですからね。また、彼にとって副詞の領分から接続詞を一つでも取り上げるようなことがあろうものなら、戦争を引き起こしかねないありさまで怒りをぶちまけます。

文法学者の数だけ文法が、いやそれ以上の文法があると言われていています。一人ひとりの文法学者が5種類以上の文法書を発行しているとも言われます。この大先生は、自分の目的完遂（かんすい）のためには、他のどの文法書もいかげんにほっておくことなどしません。他人の書いた本のすべてのページをめくり絶えずいじくり回しています。それというのもこの文法学者は、自分の業績を守るために、絶えず他人の説に目を光らせていなければならないからです。万一にでも、自分の業績が横取りされるようなことがあろうものなら、積年（せきねん）の苦労が水の泡（あわ）になることを心配しているからです。彼を狂乱ものと呼ぶのは自由です。ただ、この不幸の上ない人間も、自分自身をこの世にいないほどの偉大で幸せな人間だと信じ込んでいる。王

の身分と取り換えようかと言っても、まっぴらごめんだと答えるでしょう。ただ、このような幸福感をこれらの人間に与えているのも実は私なのです。

詩人も私が管轄（かんかつ）する人々です。彼らは根も葉もないこと、笑止千万（しょうしせんばん）なそらごとで絶えず人々を魅了（みりょう）しようとして躍起（やっき）になっています。驚くことに彼らは、こんなつまらぬものだけで、不死を得られ、またそれを他人にも分け与えられると思っているのです。彼らは、最も「自惚れ」と「追従」の従順な家来となっている人間たちで、最も私をあがめるべき人々であると思っています。

また、雄弁家はときおり私に不実（ふじつ）をはたらき、哲学者と気脈（きみやく）を通じることがありますが、基本的には彼らも私の配下にいます。彼らは大真面目に冗談を語る術をもっているのです。どんな議論でも、解決できないことを滑稽（こっけい）な言葉で笑いとばすことができるのです。そして人々を抱腹絶倒（ほうふくぜつとう）させるのです。まさに私の配下にあるからこそできることなのです。

さらに、書物を公にして、不朽（ふきゅう）の名声を得ようとしている文筆家も私が担当する人々です。誰もが私の恩を受けているのですが、紙の上に全くのバカ話を書きなぐる連中は特にそうです。自分の文章の批評を少数の評論者の評価にゆだねているような人は幸福などではなくひじょうに惨（みじ）めですね。彼らは自分の文章にやれ何かを付け加えたり、削ったり、ひねくり回したりして、9年間も手元においても決して満足などできないのです。そして、わずかな連中しかあずかれない光栄を手にするために睡眠その他多くの犠牲や労苦を払うのです。さらに、健康・肉体の美しさを損傷（そんしょう）したり、眼の病気にもかかり貧困にも陥り、すべての快樂を断ち、早老にも早死にしたり、その他たくさんのみじめな事に見舞われます。それでも、どんな犠牲をはらっても、評論家の単なるよぼよぼ爺さんに認めてもらえればそれらの犠牲は高いものではないと思っています。

私の手下の文筆家は頭に浮かぶデタラメを書いているだけですが、それがデタラメであればあるほど、無知蒙昧（むちもうまい）な連中の拍手喝采（はくしゅかっさい）を浴びることをよく知っています。二、三人の賢人がたまたまそれを読んで軽蔑（けいべつ）しようとしてそれが何なのでしょう。多数の賛同者の前では何の重みもありません。

けれども、もっと頭のいい奴は盗作（とうさく）をします。他人のものを自分の作品だとして発表します。やがてばれるかもしれませんが、それまでは当面いい思いができます。みんなからほめられ有名人とたたえられて、いい気もちになれるのです。過去の著作の多くも盗作まがいのものがたくさんあるのではないですか。そしてお互いがお互いをほめたたえます。また、あえて敵を作って相反する2つの派を作らせ競わせる場合もあります。そのようにして名声を高めるのです。人々も両者の支持者に別れ、どちらも勝利者となるのです。彼らも私のおかげで楽しく暮らしているのです。

また、学者連中で最前列を要求するのは、法律学者です。なにしろこれくらい自分を気に入っている連中はいませんからね。何の関係もないものの上に法律の文面を積み重ねるのです。注釈（ちゅうしゃく）のうえに注釈を重ね、学説の上に学説を積み上げ、自分たちの学問は最も困難なものだという顔をしています。事実、苦労したものは、何でも値打ちがあると思っています。

からね。

また、論理学者や詭弁（きべん）学者も同じ仲間です。彼らはやかましく、おしゃべりでは、集まった20人の婦人にもまさります。また喧嘩（けんか）好きで些細（ささい）なことで剣を抜き、議論を吹っかけ、真実そっちのけで言い合います。それも三段論法で武装してかかります。相手が誰であろうと関係ありません。ただし、それでも自惚れ心はひじょうに強くて本人はしごく幸福なのです。

哲学者はどうでしょう。威風堂々（いふうどうどう）としたいでたちで、ひげを生やし外套（がいとう）を着こんで、他の人間をかげろうぐらいに思い、自分達だけが唯一の賢者であると自称（じしょう）しております。太陽や月や星についてその運行や大きさを語るとき、また雷や自然の不思議な現象を語るとき、あたかも自分こそ宇宙の創造者からその神秘を授かったものででもあるかのように、神の使者でもあるかのように、その摂理（せつり）をととうと述べます。その時の彼らの表情は恍惚（こうこつ）とした感激に打たれているかのようなようです。

ただし「自然」は、この哲学者連中の憶測（おくそく）を聞いて、大笑いします。なぜなら、彼らの説に根拠など何一つないからです。何一つ分かっていないのに、すべてを知っているがごとく話します。そのくせ、自分自身については無知ですし、目が疲れているせいか放心しているからか、通り道にある石や溝にも気づきませんね。それなのに普遍的概念・独立的形相・本質性・固体本性などが自分には見えるとぬかします。三角形・方形・円形・その他幾何学的図形を迷路のように組み合わせ、さらにまた文字をあれこれと並べ替えたりして無知な人々に目つぶしを投げかけます。そんな時、彼らは無知な一般の人々をどれだけ軽蔑して見ていることでしょうか。そのうえ、ある連中は、星によって未来も占いますし、魔法そこのけの奇跡まで起こせると豪語（ごうご）します。また、幸福なことにそれを信じてくれる人がいるのですよ。

神学者の方々については口をつぐむべきであり、あえて沼をかき回したり毒草のようなものには触れないようにした方が良いのかも知れません。驚くほど尊大（そんだい）で怒りっぽい人々だから、私が何か言葉を発すれば、何百何千もの罪状（ざいじょう）をあげて私をとがめるでしょう。そして私がその発した言葉を取り消さないとしたら、たちどころに異端（いたん）宣告を下すことでしょう。それもそのはず、それがお気に召さぬ人間をたちどころに震え上がらせる彼らの術（すべ）だからです。

私は、彼らにも浴びせかけるほどの恩を与えているのに、この連中ぐらいその恩に感謝しない人間たちはいません。自惚れ心を授けてやっているのです、人々の最上階に鎮座（ちんざ）できているのです。そしてその高みから地面の上をはい回る獣や人間の群れを憐れみをいだいてながめることができるのです。私は連中の周囲に、豪壮（ごうそう）な定義や結論や必然的帰結や明白な命題や明白ならざる命題を護衛（ごえい）につけて守ってやっています。当人たちも自分で抜け道を用意し、自由自在に識別・区分をし、あらゆる難問を断ち切り、あるいはすり抜ける術を用意しています。

神学者の文章には、新造語や異常な用語がいっぱい詰まっています。さらにいろいろな種類のうんちくを彼らなりの一流の方法で盛り込んでいます。たとえば、この世界がどのように創造され配置されたか、いかなる過程でアダムとイブの原罪が子孫にまで広がっていったのか。また、どのくらいの時間をかけてキリストが聖母の胎内（たいない）で完全な形になったのかなど数え上げればきりがありません。

もっとも、こうした問題は実はもう論じ尽くされていますから、自らを大神学者と称する人々は、さらなる興奮感激させられるもっと別な問題にいどんでいます。つまり、神の創造の正確な瞬間があったか。キリストにはいくつもの血統があったかどうか。「父なる神は、その子を憎みたまう」という命題は主張できるかなどです。

さらに、この連中の七面倒（しちめんどう）な阿呆さかげんは限りがありません。なぜなら、観念、形式、本質など実際には存在しないものも見分けようとするからです。また、思いもかけぬ命題を述べます。その述べるところは、逆説派のストア派の人間さえかなわないものです。たとえば「千人の人間を殺すことは、安息日に労働するよりまだ罪は軽い」とか「どんな軽く小さな嘘をつくよりも、全宇宙の中のすべての生物が消滅するほうがまだましだ」などと言います。

この面倒な彼らの道具だては、スコラ派の学者などのおかげでもっと面倒くさいものになっています。腸のようにクネクネとした学説をさらにひねくり回していますから実に複雑怪奇（ふくざつかいき）なものとなっているのです。

パウロなど使徒とよばれた人々は、愛の行いを立派にやり遂げてきたのであり、今の神学者のように定義などというものを振り回すことはありませんでした。使徒たちはマリアを知っていても、なぜ、彼女がアダムの子からまぬがれているのかは知りませんでしたし、そのことを証明する方法も知りませんでした。ペテロは天国へのカギを託されましたが、しかし彼がどれだけ神学的なことを修めていたのでしょうか。彼らは、多くの人々に洗礼（せんれい）を施（ほどこ）しましたが、洗礼の形相因（けいそういん）・目的因などの後世の学術的なものは何一つ知らなかったはずで、確かに彼らは神を崇めてはいましたが、神霊というものを神学的に理解できていたでし

ようか。指を二本伸ばし、長髪で後ろに三本の後光があれば何でも拝まねばならないというようなことを言っていたでしょうか。

昔の教父(きょうふ)たちは、異教徒を論理ではなく生活や奇跡などによって打ち負かしてきました。しかし、今の大先生は論理でもって不作法なやつらを論破(ろんぱ)するのです。これらの輩を戦いにいかせていたら、キリスト教徒は勝利を収めていたでしょうね。何ととってもどんな冷血漢(れいけつかん)も彼らの手練手管(てれんてくだ)にはかないませんからね。どんな無気力な人間も彼らにはピクリとさせられるのです。

このような神学的態度に対して、より良い学芸を学んだ神学者の中には、彼らは単に屁理屈をこねるだけで、その中身は嘔吐(おうと)をもよおすようなもので神を冒瀆(ぼうとく)するのだという人もいます。しかし、自称(じしょう)神学の大先生と呼ばれる人々は、彼らの忠告には一切おかまいなく三段論法を積み重ね、方々の学校で自説を教えるお遊びをしているのです。そして自分たちこそ教会を支えているものだとし、自分たちがいなくなれば教会など崩壊しかねないと思っています。

このような連中がどれほど幸せかわかるでしょう。まるで水あめでも扱うように聖書をこねくり回します。自分達が得た結論を最上のものとし、教皇の言われることよりもすぐれたものでも言いたげに人々に示します。また自分たちの決めたことに合致(がっち)しないことはすべて取り消さねばならないとまで言いだします。「その命題は不敬(ふけい)である。異端(いたん)の臭いがする。音色がおもしろくない」などと理由づけします。彼らの賛同を得ないとどんな人間もキリスト教徒としては扱ってもらえないのです。「尿瓶(しぶん)よおまえは臭い」と言うことと「尿瓶は臭い」が同じことだと言ったら、その人はキリスト教徒でなくなるとまで言うのです。彼らにとっては「鍋(なべ)で煮(に)る」と「鍋の中で煮る」とは明確に違うものなのです。

これらの先生は、事細かな誤りを見つけ出します。また彼らの描く地獄の描写などは、まるで彼らがそこに数年でもいたかのように表現します。その時、彼らは幸福そのものなのです。あるいは、新しい天上界を勝手に造り、そこで自由に生活し、散策し、遊んでいる様子などを描き出したときは、彼らはなんと幸せそうなことかと思われまふ。これらのことを考えるだけで彼ら大先生の脳みそは一杯(いっぱい)になってしまいます。神学者の大先生が討論会の時、帽子をかぶるのは、そうでもしないと頭が粉々になってしまうからですよ。

神学者たちが、どんなことをして、その神学者としての威厳(いげん)を打ち立てようしているのかを見ていると笑わずにはられません。それはまさしく野蛮でゲスな言葉を吐き散らかすことによって成し遂げているのですよ。まず、どもり競争です。どもりでもなければいったい彼らが何を言っているのかなど、全く分かりません。自分の才知はひらめきだと称(しょう)して、文法に従った正しい文章など一切書きません。自分たちだけに通用する話し方、書き方をします。これらは神学者の特権となっているのです。それでも、大勢の人からうやうやしくお辞儀(じぎ)されるごとに、自分たちは神々のとなりに座っている気持ちになっているのです。

神学者の次にあげるのは、修道士や修行者です。しかし、この呼び名はまことにインチキで、彼らこそ、宗教から最も遠のいた存在なのです。彼らは私が援助しない限り、この世の中で最も

不幸な人間であると思います。彼らは、人々から不吉だとして忌（い）み嫌（きら）われているにもかかわらず、おかまいなしで自分達はとても偉い人間であると自惚れています。彼らは、最高の信仰者とは無知無学（むちむがく）で本を読むことさえできない人間であるべきだと考えています。彼らは、教会で訳も分からずがなり声で歌を歌っていますが、それが天国の聖人を喜ばしているとも思っているのです。汚（きたな）い恰好（かっこう）をして垢（あか）まみれで乞食（こじき）同然の姿こそ信仰者だとして、それを見せびらかす人さえいます。パンをもらうために門の前で唸（うな）り声をあげたり、平気で宿舎に割り込んだりして、本当の乞食の邪魔をします。不潔（ふけつ）で無知で破廉恥（はれんち）なのに、それでいて彼らは自分たちこそ真の信仰者だとして、使徒きどりでおめでたいのです。

一番奇妙（きみょう）なことは、彼らのなすことについてはことごとく一定の規則に縛られていることで、数字的なその定めと少しでも異なるような行いなどがあつたなら重い罪を犯したことになると思っていることです。靴の結び目の数から帯の色・布地、着物の裁（た）ち方、頭巾（ずきん）の形、睡眠時間まで事細かに決められているのです。それを、どんな人にも同じようにするように強いるのですから、何と不平等なことであると言えるでしょうか。しかし、このことが彼らの得意とするところで、そのようにしない一般の人々や他宗派の人間を軽蔑する根拠となるのです。

口では使徒の慈悲を説く人間が、あるキリスト教信者が少しでも濃い色の着物を着たり、少しでも違った着方をしようものなら、大声を張り上げてののしります。中には、お金にさわることを毒にでも触れるように恐れるくせに、酒や女に触れることは平気な人間もいます。その上、何何派などと特別な名前と呼ばれることをいたく喜びます。宗派の数などには限りがありません。

これらのご連中の行う典礼や人間がでっち上げた伝承は、彼らには実に値打ちのあるもので、これらを守り抜いたものは天国に行くというご褒美（ほうび）を得ると信じています。しかし、イエスはこのような行為を軽蔑（けいべつ）していたはずで、このイエスの心をまるで忘れているとしか言えません。

ある者はありとあらゆる食材をため込んでいますし、数えきれないくらい聖歌をがなりたて人もいます。また別の男は一回の食事で腹が裂けるほど食べていながら、何万回も断食したと自慢すしますし、積みきれないほどの勤行（ごんぎょう）を行ったと自慢する者もいます。さらには、60年間手袋をせずにお金に触ったことがないと自慢する者もいますし、脂汗まみれの頭巾を差し示し自慢する者もいます。55年間も同じ場所で暮らしたと誇る奴もいますし、絶えず黙っていたために話をする習慣をなくしてしまったという者までいます。

イエスはこんなものを大事にせよと言ったことはありません。愛のみを唱えたのです。自分の善行を心得すぎている人間など私は決して認めません。もし、彼らが、自分たちは私より聖なるものであると認められたいなら、どうぞ勝手に好きな天国に行くのもよろしいし、もう一つ新しい天国でもつくってもらって、そこにでも行けばいいのです。しかし、そこでもし、彼らより水夫や馬車引きのほうが大事にされているとしたらどんな顔をされるでしょうかね。まあ、それに気づくような事が起こるまでは彼らも私のおかげで楽しい夢を見ていられるのですがね。

これらの連中は、国家・公共のことは何一つ気にもかけませんが、だれもこのことを軽蔑しま

せんね。なぜなら彼らは、懺悔（ざんげ）によってあらゆる人々の秘密を握っているからです。当然、彼らも自分たちが手にしたこの秘密を漏らすことは罪になることを知ってはいますが、酒の席では名前こそ出しません、どこの誰かは十分推量できる形で、それらを酒の肴（さかな）にして大笑いしています。またこういう連中を怒らせたら大変です。説教においても遠回しにして、これら憎い敵のことを題材にします。よっぽど鈍い連中でない限りだれのことか分かるように話し、仇討（あだう）ちをします。やつらの口には餌（えさ）でもくわえさせておかないと、絶えず吠え続ける犬と同じで、どこでも吠（ほ）えまくります。

彼らにはどんな喜劇役者もかいませんよ。雄弁家のまねをするのは堂に入ったものですよ。身振り手振りをまじえ、声に調子をつけ震わせ、表情を変えながら、最後には大声で叫び出すのです。説教の方法などは手練手管（てれんてくだ）の奥義（おうぎ）として秘伝（ひでん）されているのです。まず祈祷（きとう）からはじめ、愛について語る時にはエジプトのナイルの話を出すとかそのパターンは決まっているのです。

私も、あるご立派な瘋癲（ふうてん）学者が三位一体説について説明をしているのを聞いたことがあります。自分の知識がいかにもすばらしいものかを見せびらかせるために、実に新奇（しんき）なやり方をしていました。いかにも馬鹿げた文法上の理屈（りくつ）や数学まで持ち出して事細かく説明していました。聞いている人々はいったい何のことやらどんなことになるのか心配しましたが、ご当人はおかまいなくすべて文法上の原理と数学的図象の中で説明がつくとしていました。この神学者はこの講演のために9か月間を準備に費やしたといえます。いまではそのためか、その神学者は盲目になっています。しかし、栄光を得たとして全く後悔（こうかい）のそぶりなどありません。

また違う偉い有名な神学者は、イエスの字を分解してそこに罪という意味が隠されていると文字学的に証明したというこののです。イエスという言葉が格により三種に変化することから三位一体説が証明されたとも言いました。罪までもイエスという言葉で分解すれば説明できるとしたのです。

また、まことにバカげたことを前置きにして話を始める輩もいます。自然のなかで暮らす羊飼いの男でさえ、こんな間拔（まぬ）けな前置きをして話はしませんよ。ところが、わが学校の先生たちはこの修辞学を傑作（けっさく）たらしめようとして使いまわします。いったいどんな話を始めるのかと聴衆が興味を示したら、彼らのたくらみは成功なのです。

そういう輩に限って本来の福音書にはちょっとしか触れるにすぎません。さらに神学上の問題を論じたてまくり、これこそが自分たちの本来のあり方だとのたまわります。さらに、自分は尊大であることを示すために神聖博士などの称号を求めます。そして、何も分からぬ民衆に三段論法でわめきちらすのです。はてには最後にはくそ面白くもない寓話（ぐうわ）を持ち出し、世にも奇怪なでっち上げを語るのです。

また、この連中は、前口上（まえこうじょう）は自分にも聞こえないくらいの低く小さい声で話すべきだということを知っています。そして人を感動させるためには時々大声を張り上げなければならないことも知っています。だから彼は突然前後の見境もなく凶暴（きょうぼう）な叫び声をあげます。またしゃべりながら徐々に熱くなっていくべきだということも教わっています。くだ

らないことでも熱弁（ねつべん）し始めます。だから彼らは話が終わると息が切れています。

また修辞学は、笑いをおり交ぜることを心得ていますので冗談を言っただけでは場を陽気にしようとしません。まあ彼らはそこらにいる道化師とたいして変わりません。いや話自体は道化師のほうが上手でしょうがね。しかし、彼らも私のおかげで賛美者となれているのは確かなことです。特に商人や女どもの追従でかくも自分を誇（ほこ）っていられるのですね。商人はこれでもかというおべっかを使ってやれば、金が回ってくるのを知っていますからね。女はこれらの連中に亭主の悪態（あくたい）をぶちまける楽しみを持っているのですよ。どれだけ彼らが私の御厄介（ごやっかい）になっているかわかるでしょう。嘘八百（うそはっぴやく）、滑稽なでたらめ、わめき声だけで人間世界に暴君として君臨できるのですからね。

次に王様や大貴族の話に移りましょう。もし、これらの人々が少しでも良識（りょうしき）をもっていたら、その生活くらいもの悲しいものはないでしょう。真に君主らしく行動しようとするなら、多くの尊い犠牲まではらってその地位を得ようとする人などいないでしょう。一旦権力を手にしたら、自分のことなどさておいて公共のことだけを考え続けねばならないし、自ら発した法規を自分が守らないことなどできるはずがありませんし、行政・司法の面においても公正を貫かねばなりません。

王とは、人々に幸福をもたらす者にもなれば、厄災をもたらす者にもなっています。他の人間でこれほど人々に重大な影響を及ぼす者はいません。王侯は財宝に恵まれておりますので、あらゆる誘惑に取り囲まれています。それらの誘惑に惑わされることなく、己の義務を果たすためには大変な努力が必要です。それだけの責任が絶えずあるのです。もし王侯が自分のこの立場を省（かえり）みるなら心安らかに睡眠することも食事を楽しむこともできないと思います。

けれども、こういう時に私は、彼らに恩を施すのです。王侯たちはこの心配をすべて神に預け、魂の不安の一切を取り払ってくれる術を心得た人々の言葉しか聞きたがらないのです。狩猟（しゅりょう）をしたり、立派な馬を飼ったり、自分の金庫に財宝を入れるための方法を毎日発明したりさえしていれば王者としての役割は十分果たした気持ちになっていられるのです。

不正を正義らしく見せ、人民大衆の人気を得ておくためのおもねる方法も心得ているのです。この世の実際の王侯を思い描いてみてください。法律を認めず、快樂におぼれ学問を憎み、公益をせせら笑い、自分の欲望と利己心のみで生きています。このような王侯に黄金の首飾りや冠（かんむり）を与え、国家への献身を意味する衣など着せて、どんな人間よりも優れた存在ですよとでも言ってやりなさい。普通の人間なら恥ずかしくて顔を赤らめ、いつ辛辣（しんらつ）な笑いを浴びせかけられないかびくびくしてしまうでしょう。

さて、次に宮仕えの方々について述べましょう。彼らぐらい平つくばってへいへいして、阿呆で卑しい人間はいません。そのくせどこへ行っても最前列へのさばり出ようといたします。彼らは、美德や知恵を持っているという証（あかし）である黄金や宝玉（ほうぎょく）を身に付けていますが、それだけで満足し、美德や知恵の実践は人まかせで自分には関係ないという態度です。こういう輩の一切は、王様に対して「閣下」「殿下」「大君」の三つをはさむことを心得ています。赤面などせず追従やお世辞（せじ）を言う才能を持っているのです。そのために自分の面（つら）の皮をいつもテカテカに光らせているのです。

彼らは、昼ごろまで眠って朝飯を食べるとすぐ昼飯を食べ、それからサイコロだ将棋だ道化師だ浮かれ女だとお遊びをして、その間に一度か二度軽い食事をして、そして夕食の食卓につき酒宴（しゅえん）を行うのです。このように彼らには何一つ人生がいやになることを経験することもなく月日は過ぎていくのです。これにはさすがの私もむかついておさらばしたくなることもあります。何ととっても、人より長い裾（すそ）を垂らしていればまるで妖精（ようせい）にでもなったつもりの輩に取り巻かれ、肘（ひじ）はり競争をして、少しでも重い首飾りをぶら下げて自分の権勢を見せびらかそうとしているのだからですね。

教皇・枢機卿（すうききょう）・司教の方々はどうでしょう。彼らは、王侯そこのけの勢いです。すこしでも自分を省みたら次のようなことが分かるのではないですか。白い法衣は汚点のない生活の証ですし、結びつけられたミトラは新約と旧約聖書に対する深遠な知識の象徴ですし、手袋は人間生活の汚れから浄められているということですし、胸にさげた十字架は人間の情念に対する勝利の印であることは承知のはずです。これらのことに思いをはせたら毎日の生活が悲哀に満ち、不安でたまらないはずです。ところが今までのところ、彼らは美衣飽食（びいほうしょく）する以外何も考えてなどいません。多くの子羊の世話は、神や自分たちの代理人にまかせきりです。司教という称号の「勤労」「配慮」などの意味はすべてお忘れです。ところが、いざ金儲けの段になると俄然（がぜん）、司教におなりになります。目を覚まされるのです。

彼らと同じように枢機卿がたも自分たちが使徒の後継者で布教の義務を課されていること、霊的な財宝の所有者ではなく分配者であることを悟らねばなりません。

衣の色は品行の純潔さや神に対する愛、衣の大きさはすべての人に援助すべき慈愛の大きさを表しているはずです。つまり、人を導き、激励（げきれい）し、慰（なぐさ）め、矯正（きょうせい）し、警告し、戦乱を終わらせ、人々のために財宝はおろか、自分の血さえも惜しげもなく差し出すことを意味しているはずです。第一、使徒としての役割を果たすべき枢機卿に地上の財宝など必要でしょうか。もし枢機卿たちがこれらのことを反省し、その高い地位に対する野望を捨てるなら、昔の使徒のように勤労と献身の生活を送られるはずです。

また、もし教皇が、キリストの清貧（せいひん）、忍苦（にんく）、賢明、苦難、その現世蔑視（げんせべっし）をまねようとされ、その教皇を意味する「至誠（しせい）なるもの」の称号のことをお考えになったら、この世でこれ以上の不幸な人はいないでしょう。この高位を買い求め手に入れ、そのあとは剣と毒薬とあらゆる暴力でそれを守ろうとする人がいったいいるのでしょうか。もし、彼らにたまたま知恵が宿ったとしたら、あれほどの財宝、栄養、課税権、衛兵、快樂を、そしてあれほどの数の馬などの特権を自ら手放さなければならないのですよ。それを、ほんのわずかの私の計（はか）らいで、すばらしい商売、莫大（ばくだい）な収穫、大海のような幸福を手にするのです。

もし、この私の計らいというものを手放したなら、徹夜、祈祷（きとう）、説教、研究、苦行など面白くもないことをやらなければならないのですよ。さらにそうなると、今度は書記や公証人（こうしょうにん）、弁護士、秘書官などはどうなるのでしょうか。いわゆるローマ教皇庁の御厄介（ごやっかい）になっている、いや言い間違えました、支えている人々は飢餓（きが）に瀕（ひん）してしまいますよ。だから、教会の首長たるかたがたが、杖（つえ）にずた袋で暮らす生活にも

どることは、非人情的なことになってしまうのです。

現在では、教皇は、一番大変な仕事をペテロ・パウロに任せきりで、もっぱら自分は豪華な儀式やお楽しみにかかりきりです。私のおかげで教皇ぐらい楽しい生活をしているかたはおられません。これぐらい何の心配事がない人はいません。なぜなら、「至聖」とか「至高」とか呼ばれて儀式に現れ、監視の目さえ光らせていれば事足りるからです。奇跡を起こすのも時代遅れで必要ありません。民衆教化などは疲れますよね。聖書の説明は学校で十分おこなっていますしね。祈禱も無駄ですしね。貧しい生活をしていると軽蔑されますしね。涙は不幸な者が女が流すものです。争いで負けることは、自分の足にたやすく接吻（せつぶん）さえさせない人間にとって恥辱（ちじょく）そのものですからね。結局のところ死ぬことはつらいことですし、ましてや十字架の上で死ぬことは不名誉きわまりないことですよね。

教皇さまの武器は、パウロの甘美（かんび）な言葉ですね。乱発されますよね。たとえば、聖人執行停止、破門（はもん）など人々を地獄に落とすものです。これらのペテロが残した教皇に対する遺産を削り取ろうとするものがいようものなら厳しい罰を彼らは下します。ペテロは「一切を捨ててキリストに従います」と言っているにもかかわらず、教皇様方は、この聖人のためと称して、領地、税、財宝で一王国を築き上げているのです。これらを維持するために、剣と火を持ってキリスト教徒に血を流させているのです。そして、敵と称する人々を寸断（すんだん）し、この教会を守っているつもりになっているのです。教会の敵とは、キリストを取引の材料につかい、教えをゆがめキリストを暗殺している不敬な教皇ではないのですかね。

教会は血潮（ちしお）で建てられ、血潮で盛大となったのです。それをキリストらしいやり方で維持することができないとでもいうように、未だ血潮を流させ続けています。戦争は野獣にふさわしく、人間にはふさわしくないものです。それは気違いめいたもので、詩人たちは、地獄の醜（みにく）い女から届けられたものだと思われているほどです。それは実に危険な疫病（えきびょう）ですから、良風美俗を腐敗させてしまいますし、極悪の強盗を最上の戦士としてしまいます。キリストとは何の関係もない不敬冒瀆（ふけいぼうとく）なものです。ところが教皇は一切を放り出して戦争を主な仕事としています。老いぼれなのに、戦争となると出費にもひるまず、疲労ものともせず、一步も引かず、法律・宗教・平和など人類全体をめちゃくちゃにしています。そしてそこには博学なおべっか使いがついていて、この狂乱を熱情とか信仰・勇気というような美名で飾り立て、どうやって必殺の剣のさやをはらうことができるかとか、キリストが隣人に対して持たねばならぬと説いた完全な慈悲の心に違（たが）うことなく、いかにして、その剣を兄弟の胸に刺すかの方法を考えだすのです。

教皇はこれを自分の考えで行うようになったのでしょうか。あるいはドイツの教皇のやり方をまねたのでしょうか。今や教皇は礼拝や典礼を捨てて戦うことを本分としています。

普通の司祭も自分たちが受け取る税金を確保するために司教に負けずと兵士として戦闘しています。剣であろうと槍であろうと、何でも来いというありさまです。彼らは、民衆により多くの税金を払うべきだとする口実を古い文書の中から巧みに見つけてきます。同じところに彼らの民衆に対する義務も書かれていますが、それを読むことは忘れてしています。司祭たる者、天上のことだけに心を用いねばならないのにそんなことは考えようともしません。彼らは、ただ、祈禱をぶ

つくさ唱えればよいとだけしか考えていません。どこの神様がこういう連中の言うことを聞き取って下さるでしょうか。

彼らは俗世間の連中と同様、金儲（かねもう）けに奔走（ほんそう）し、そのための法規の知識にもたけています。そのくせ、やっかいなことは他人にまかせます。君主が政治の煩わしさを大臣に、大臣はその代理人に押し付けるように、この連中は信仰心をすべて一般民衆に譲ります。信徒はというと、それを「聖職者」と呼ばれる者につき返します。まるで、自分は教会とは何の関係もなく、洗礼の請願（せいがん）などは形式にすぎなかったとでもいうありさまです。教会に属する在俗司祭は、まるでキリストにではなく、現世に属しているように、修道司祭にその重荷を押し付けます。そして、その面倒を次から次に下位の位の修道士に押しかぶせていくのです。伝道という仕事も教皇から司祭に司祭から助任司祭にと任せていきます。そして助任司祭は托鉢修道士（たくはつしゅうどうし）にと次から次へと下位のものに押し付けていくのです。

私は彼らの生活をあれこれ詮索（せんさく）しようとしているわけではありません。ただ、私のおかげなどなくして、誰も幸福には暮らせないということを言いたいだけなのです。

罪を罰し、正義を実行させる神も私同様、賢人とよばれる人を非難し、瘋癲（ふうてん）と呼ばれる人にあふれるほどの幸福をもたらしているのですから、私も同じようなことをするのは当然なことではありませんか。運命の女神は、賢明な人間ではなく、むこうみずな人間を愛するものです。知恵は人間を臆病（おくびょう）にします。だから賢人はどこへ行っても、貧困・飢餓の中において、同情を得ることもなく暮らしています。

これに対して、阿呆（あほう）というものは、いつでもどこでも栄えていくものなのです。もし幸福が宝石で飾り立て、神々のお仲間に入ることなら、知恵は全く無用なものなのです。彼らにとって知恵くらい評判の悪いものはないのです。もしもみなさんが富を得たいとお思いになったら、知恵に導かれて商売する人間のもうけなどたかがしれているのではありませんか。そういう商人は、偽善（ぎぜん）は嫌いますし、嘘をついているところをつかまえられたら赤面（せきめん）するでしょう。

賢人が教会の高い位や富を野望（やぼう）しても、口バや牛馬のほうが早くその地位に就き、望みもかなえるでしょう。快樂は心底、瘋癲の味方ですから、賢人からは遠ざかってしまいます。人生を楽しく生きようとするならば、賢人であることを避けなければなりません。出会いがしらにぶつかった獣と付き合うぐらいでなければ人間は幸せにはなれません。国王であろうと教皇であろうと友人も宿敵（しゅくてき）も誰もがお金を求めていますから、賢人が金銭を蔑視（べっし）する以上賢人と一緒にいることは避けなければなりません。これが、私のような痴愚神が礼賛される理由なのです。ただ、このことが単なる自画自賛（じがじさん）に終わらないために、ともかくさまざまな文献を引用してこのことを証明してみましよう。

ことわざに「持っていない時は、持っているように装（よそお）いなさい」というものがありますが、それから次のような句が引き出されました。「本当に賢いものはバカを装う」のだというものです。みなさんは、痴愚女神がどんなにありがたいものかお分かりになったことだと思います。なぜなら、痴愚女神が関わるだけで賛美されるものとなれるからです。「思慮（しりょ）には狂気を混ぜよ」と言った人さえいます。また「ときに、わけのわからない言葉を吐くのは楽しい」とも言います。また「賢人となって怒るより、バカを装うほうがいい」とも言います。「全地上は瘋癲（ふうてん）に満つる」ともいいました。最もすぐれた善とは、最も多くの人にとって都合のいいことなのではないですか。

それでは次に、キリスト教徒にとって最高の聖典である聖書の内容に基づいて自画自賛してみましよう。勝手なことをいたしますがどうか神学の先生、お許してください。「愚か者は数限りない」という言葉が『伝道書』の第一章に書かれています。これはすべての人間に対して語ったことですね。また、エレミアは「すべての人は、自分の知恵によって愚かになる」と言っています。「知恵ある者はその知恵を誇ってはならない」とも言っています。要は、賢いのは神だけで、人間は知恵など持っていないということです。人生など痴愚女神のたわむれにすぎないのです。人間はすべて私の支配下にあるのです。

人生に狂気や痴愚なかつたら、一体何の魅力があるのでしょうか。またある弁舌家は「知識を付け加えれば苦しみも増し、知恵を増す者は怒りも増す」とも言っています。また「賢者の心は哀傷（あいしょう）の家であり、愚者の心は喜楽（きらく）の家」にあるとも言っています。まさに痴愚

女神の礼讃そのものであります。

ちょっと聞いてみます。鍵（かぎ）をかけて大事にするのは、貴重な品物ですか、それともありふれたつまらないものですか。当然おわかりですよ。だから、道端に宝石や黄金がころがっていないのですよね。ということは、人目につく明るいところに出している知恵より、人目につかないところに隠し持っている痴愚のほうがすぐれているということですね。聖書にも自分が賢人だと思っている人よりも、愚か者であると自覚している者の方が謙譲（けんじょう）の美德を有していると言っています。聖書の中にある「道を歩む愚者は、自分が愚かなため、他の人もすべて愚かだと考える」という一文を私は次のように解釈します。多くの人間が自分は他人と変わらない、いや他人より上だと考えているのに、自分も他者も痴愚という長所を等しく持っていると考えている人は立派だということです。立派な国王にもかかわらず、「私はすべての人間の中で最も愚かだ」と言った人もいます。パウロも「私は誰にもまして狂った人間である」と言っています。まるで狂っているという点で他人に負けるのは恥だとでも言いたいような口ぶりです。

このようなことを私が申し上げると、えらいギリシャ哲学の先生方は、何たる狂ったような解釈だ、まさにそれこそが痴愚女神と言われるゆえんだとおっしゃることでしょう。パウロが言いたかったのは、自分もあなた方同様、いやそれ以上にキリストを信仰している。キリスト教に狂っていることを言いたかったのだと述べられるでしょう。まあ、別にそういわれるならその考え方に従いましょう。私は、あなた方のような狂った人から見れば、狂っているように見えるのだということも言えるのではないですか。

神学者の先生方は、聖書を自分が思うままに解釈することが許されているのです。たとえばパウロの言葉には、聖書の中にある時は矛盾などしていないが、一旦聖書をでて神学者の先生たちが自由に引き延ばしたり、解釈したりすることで矛盾が生じてきます。また、聖書の記述内容についても、自分たちにとって都合の悪い所は削り、立場を悪くしないところだけを取り上げて紹介するのです。

神学者たちは、聖書の方々（ほうほう）からいくつかの単語を拾い上げそれを適当にくっつけて自分の都合のよいように理屈付けをして紹介するのです。たとえ前後関係に脈絡（みやくらく）がなく、いや矛盾が生じようとも意図せず自由に解釈するのです。恥知らずのことなのですが、このやり方が成功をおさめたので法律学者などからは彼らは羨（うらや）まれる存在なのです。神学者にすれば、聖書の中から適当な言葉を引き出してくれば、火と水を一緒にしてもしっかりとさせることができるのです。神学者の先生方は、イエスは、危機に瀕して弟子たちが集まり、「全力を合わせて戦おう」と申し出た時、そのような思いを取り払い、みんなを今までの状態で何か不自由でもあったのかといい、靴も履（は）かず、食料も何も持たせず一同を旅出させたのです。

ところが、今では、財布を持って、食料を持って、衣を売ってでも剣を手に入れたと平気で述べています。イエスの教えは、ことごとく温和・忍耐・人生蔑視（べっし）です。このような解釈が成り立つはずはありません。イエスは、弟子たちに対しても、靴もたとえ衣であろうと一切のものを捨てて無一物となってもただひたすら福音伝道せよと言いました。剣をもてと言ったのは盗賊や親殺しに対しての武器を持ってといったものではありません。自分のよこしまな心を切り捨てるための精神の剣のことなのです。それを神学者の先生方は、迫害に対する防御（ぼうぎょ）のため

の剣だと説明します。つまり、イエスが使徒たちをあまりにもみじめな状況で福音の旅に出させることを悔(く)やみ、十分な食料をもち「威風堂々(いふうどうどう)」と旅立たせるようにしたと勝手に修正しているのです。

彼らは、イエスの言ってきた、福楽(ふくらく)は心やさしい人々のためであって凶暴(きょうぼう)な人間にはないこと、百合(ゆり)や雀(すずめ)を手本にせよなどの言葉は完全に忘れ去っています。彼らにとっては、剣を平気で持ち、必要以上の物を手にすることもいとわないのです。わが神学者先生は、剣は暴力を退ける一切のもの、ずた袋は生きるのに必要なものを表していると解釈しているのです。それで使徒たちは武器を持ち、財布や食料をいっぱいにして旅立つのです。イエスが、弟子が剣を抜こうとした時、さやにおさめよ、剣を取るものは剣によって滅ぶと言ったことも全くおかまいなしです。

ある人が神学者に異端者を改めさせるためには議論するより焼き殺した方が良いと言ったということは、聖書のどこに書かれているかを尋ねました。すると、眉(まゆ)の形からいかにもそれと分かるようないかめしげな老人の神学者が彼に対して、言葉激しく次のように答えました。異端者は二度訓戒(くんかい)して後、だめなら捨てよと書いてある。そしてついに、それは生命を肉体から切り離せということだ、これこそが義なのだと説明したのです。また、「悪事をなしたものは生かしておくべからず」と書いてあるから、すべての異端者は悪事をなすものであるから当然、生かしておくべきではないと言っていました。この言を支持する神学者もおり、驚きます。しかし聴衆は、その巧みな演説に賛意を示すようになるのです。そして、「悪事をなす者」の解釈をどんどんと広げていくのです。

パウロは自分は愚か者だと言っています。イエスゆえに愚か者になったとも言っています。まさに、痴愚女神の礼讃ではありませんか。さらに彼は「知者となるためには愚か者になれ」とも言い、イエス自身も弟子を「心鈍(にぶ)き者」と言っている下りがあります。これらのことは驚くにはあたりません。なぜならパウロはイエスの中にも痴愚な部分を認めているのですからね。まあ、人間のあさはかな知識から見れば、神は愚かに見えるだけだという意味ですがね。十字架上での言葉も滅びゆく人間には愚かに聞こえるという意味ですね。イエス自身も神なる父に向かって「あなたは、私の愚かさを知っている」と言っているぐらいです。

王侯たちは賢者を嫌い警戒(けいかい)しますね。粗野(そや)で暗愚な人間を愛します。イエスも自分は賢いと思っているような人間は絶えず非難してきました。パウロも「神は愚かな者を選び、愚かさをもって世を救おうとなさった」と述べています。神も「知者を滅ぼし、その知恵を空しいものにする」とも言っています。神は知者ではなく、愚者に教えを啓示(けいじ)したのです。神は知者によってこの地が正されることはないとしています。これはイエスが律法学者ではなく、一般の人々と好んで一緒にいようとされたからです。

イエスは、獣の中でもきつねのようにずるがしこいものは大嫌いです。だから乗り物は口バに乗りました。獅子にまたがることもできたのですが、それをあえてしませんでした。聖霊も鷹(たか)や鳶(とんび)のかたちではなく鳩の姿で降りてきました。イエスは人々を子羊と呼んだことも頭に入れてください。弱くて、頭が悪いという例えなのです。また彼は自分のことさえ子羊と呼び、またそのように呼ばれることを喜んだのです。

これはすべての者が痴愚だという意味なのです。イエスは人間の形となって現れた時、痴愚となり人間の罪も背負ったのです。十字架という愚かさを選び、幼児・百合・けし粒など愚かで何の術策（じゅつさく）のないものを手本にせよと言われたのです。あれこれ思うことをせず、ただひたすらキリストに身をまかせよと述べられたのです。

アダムとイヴに知恵の実を食べないようにいわれたのも同じことです。パウロも知識を良くないものとししました。「私は愚かさゆえに罪を犯したのです」と多くの者が神の前で懺悔（ざんげ）しました。自分の無知を正直にさらけ出せば許されるのですよ。十字架上のイエスは、神に対して私をはりつけにした者は、自分が何をしでかしたかも理解できないのでゆるしてあげてくださいと言っています。つまり彼らは無知だったのだと言っているのです。パウロも知らずにしてしまったことなのでゆるしてやってくださいと言っています。つまり痴愚であったためだと言ってゆるしをこいているのです。これらは、痴愚女神の力を借りなければならないということを意味しています。

キリスト教と痴愚はひじょうに関係が深く、賢さとはほんのわずかの関わりしかありません。その証拠に子どもや老人や女性は他の者より儀式祭典を喜び、祭壇（さいだん）のそばにいつもいたがります。また宗教の最初の礎（いしづえ）を築いた人は単純さを備えており、学芸とは縁遠かったと思われまゝ。キリスト教信仰者は痴愚そのものではありませんか。財産を捨て、罵倒（ばとう）をもものともせず、断食、涙、労苦をいとわず、死まで求める。これが痴愚以外のなにものでもありませんか。彼らはあらゆる普通の感情をなくし、狂気を求めているといってもいいのではないのでしょうか。瘋癲（ふうてん）そのものですよ。

キリスト教徒が求めている幸福とは、錯乱狂気（さくらんきょうき）以外のなにものでもないのです。キリスト教徒は、プラトン主義者と同様に魂が物質的なものに影響され、縛られすぎると、真実が見えなくなると言っていますね。哲学は死を瞑想（めいそう）することだと言われますが、これは哲学により魂が肉体的なものから解放され真実が見えるようになるという意味です。

いや、私はそうではないと思います。魂が肉体を正常に用いている間は健全で、逆にその束縛（そくばく）から解放されると「狂気・痴愚」になるのではないですか。そしてもし、これが肉体の異常と関連があるなら、なんの疑いもなくこれは狂気・痴愚です。このように、解脱に近い状況になると急に予言を行ったり、神聖なものを表出（ひょうしゅつ）したり、神通力を発揮したりすることがあります。死の間際になった人も同じような状況になることがあります。宗教的熱狂者も似たようなものであります。多くの人にはそこに違いを見つけることはできないでしょう。仮にプラトンの言う洞窟の壁に映るものを現実と信じている人々のもとに、真実を見た人がやって来て真実を語ったとしても、真実を見た人間こそが狂気の人間だとして追い払われてしまうでしょうね。

普通の人間は、肉体的なものを求め、それが唯一のものだと思い込む一方、敬虔な人間はそのようなものを軽蔑し、見えないものを観照（かんしょう）し、心身ともに恍惚（こうこつ）となるのです。普通の人間は財宝を大切にし、魂のことなど最後にしか考えません。それどころか、魂の存在など信じていません。なぜならそれらは目に見えないからだと言います。それに対し、敬

虔な人間は神に向かって努力し靈魂のために心を砕（くだ）きます。肉体的なものや金銭的なものは蔑視（べっし）し、まるで腐敗物（ふはいぶつ）であるかのように避けるのです。敬虔な人間は、できる限り肉体的な粗雑（そざつ）なものとは無縁なものに向かっていきます。

ところで靈魂は、働けば働くほどその真価が発揮されるものです。敬虔な人は、肉体的な感覚は鈍らせようとしますが、普通の人間はこの感覚をおおいに活用します。聖人の中には、ぶどう酒のつもりで油を飲んでしまったという人もいるくらいです。

性欲・食欲・眠気・怒り・傲慢（ごうまん）などは粗野な肉体に密接に関係しています。こういうものに対して、敬虔な人は一生懸命抵抗しますが、凡人はそれなしには生きていけません。また友情・祖国愛・家族愛などのような中間的な情念もあります。凡人はこれらの情念にも引きずり込まれますが、敬虔な人は、それを滅するかあるいは最高まで高めようとします。

父親を愛するとは、至高の知恵を抱えている立派な人間として愛するのです。それ以外に愛する者に対し求めることはありません。敬虔な人は目に見えるものは、目に見えないものより劣っていると考えます。例えば断食にしても、食しないという形式にではなく、情念の制約に重きを置くのです。彼らにとって典礼の形式は無用なものだとはしませんが、その中身を重視します。そこに靈的な要素がないとしたら何の意味もなく、いやむしろ害になるとまで言っています。ミサとは、諸々の情念を消し去り、イエスの死を自らの中に再現するものでなければなりません。

しかし、凡人は立ち位置など形式的なもののみを気に配り、それさえ行えばそれでよいと考えているのです。そういうわけで、敬虔な人間と凡俗（ぼんぞく）な人間が互いに相手方を見れば痴愚狂気に見えますが、私にとって痴愚と呼ばれるのにふさわしいのは、敬虔な人々だと思います。敬虔な人が求めている最高のものは、まさに痴愚そのものなのですからね。

たとえば、人を恋するということは我を忘れて相手の中に入り込むことであり、狂気以外のなものでもありません。我を忘れて夢中になれば、夢中になるほど人間は幸福を感じるのです。もはや自分の体の器官を正常に用いることができなくなるぐらいが最高なのです。その愛が完全であればあるほど、その錯乱もはなはだしく甘美なものとなるのです。恋からさめるとわれに戻るといわれることはまさにそのことを表しているのです。恋に落ちて狂人になることが幸せなことではないですか。

以上が私が申し上げたかったことです。いろいろとご意見があるかも知れませんが、痴愚女神のおしゃべりだとして聞き流してください。みなさんは何か結びの言葉を期待しているかもしれませんが、だけど今まで話してきたことはほとんど忘れてしまいました。それではさようなら、痴愚女神の奥義（おうぎ）をきわめられた方々に喝采（かっさい）をお送りします。